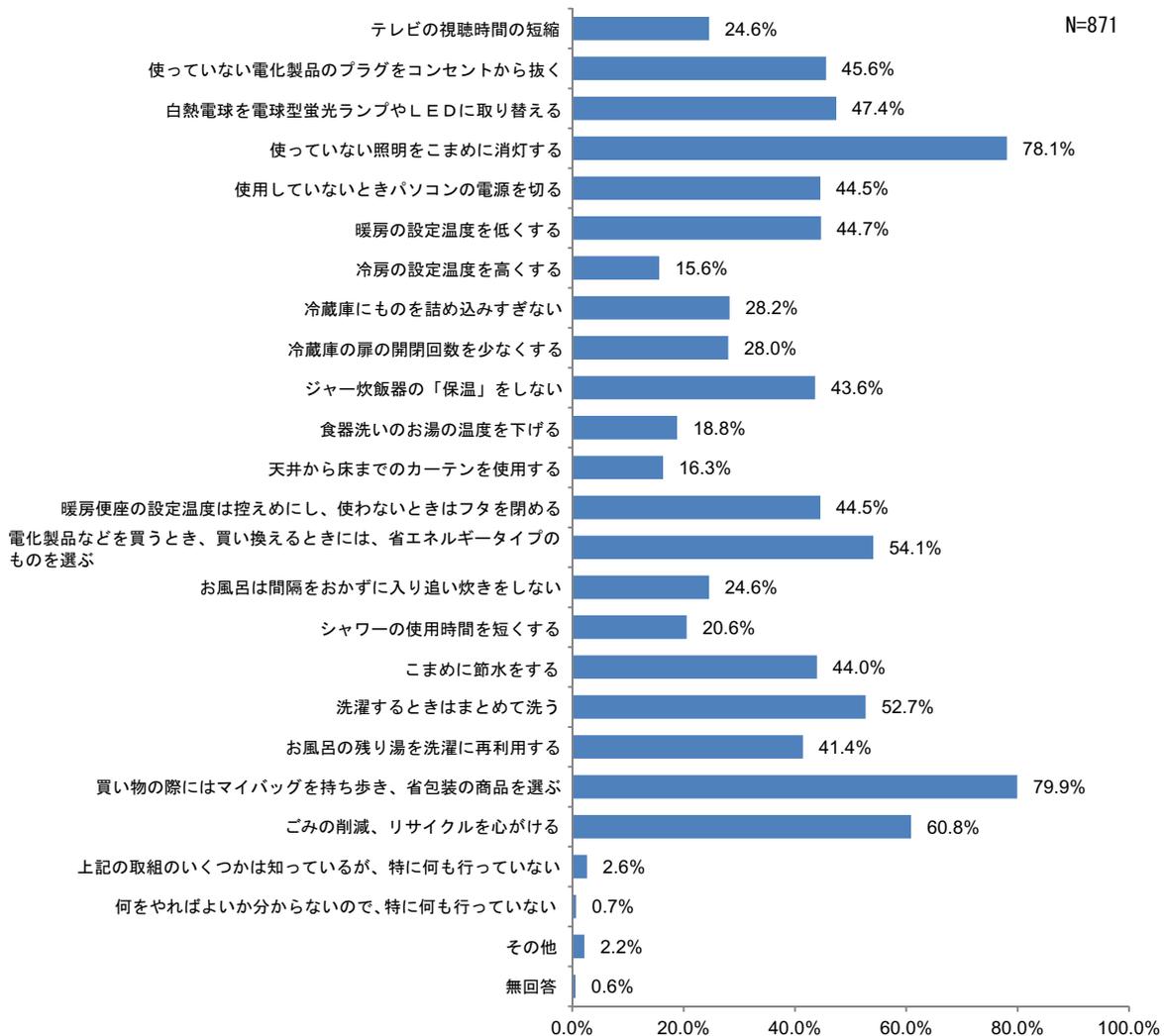


## 4 エコアイランド北海道について

問1 あなたが日常生活の中で、地球温暖化防止に向けて取り組んでいる内容について、次の中からいくつかでもお選びください。



### 【全体】

「買い物の際にはマイバッグを持ち歩き、省包装の商品を選ぶ」（79.9%）と答えた人の割合が最も高く、次いで「使っていない照明をこまめに消灯する」（78.1%）、「ごみの削減、リサイクルを心がける」（60.8%）の順となっている。

### 【圏域別】

「買い物の際にはマイバッグを持ち歩き、省包装の商品を選ぶ」については、道北圏（82.0%）が最も割合が高く、次いで道央圏（81.7%）となっている。「使っていない照明をこまめに消灯する」については、道北圏（82.0%）が最も割合が高く、次いで道央圏（78.7%）となっている。

### 【人口規模別】

「買い物の際にはマイバッグを持ち歩き、省包装の商品を選ぶ」については、人口10万人未満の都市（83.3%）が最も割合が高く、次いで札幌市（82.8%）となっている。「使っていない照明をこまめに消灯する」については、札幌市（79.1%）が最も割合が高く、次いで人口10万人未満の都市（79.0%）となっている。

**【性別】**

「買い物の際にはマイバッグを持ち歩き、省包装の商品を選ぶ」については、男性 70.4%、女性 89.6% となっており、「使っていない照明をこまめに消灯する」については、男性 74.3%、女性 82.1% となっている。

**【年代別】**

「買い物の際にはマイバッグを持ち歩き、省包装の商品を選ぶ」については、40～49 歳（84.4%）が最も割合が高く、次いで 50～59 歳（84.0%）となっている。「使っていない照明をこまめに消灯する」については、70 歳以上（89.2%）が最も割合が高く、次いで 50～59 歳（80.1%）となっている。

**【職種別】**

「買い物の際にはマイバッグを持ち歩き、省包装の商品を選ぶ」については、主婦（93.1%）が最も割合が高く、次いで事務職系（80.0%）となっている。「使っていない照明をこまめに消灯する」については、主婦（86.1%）が最も割合が高く、次いで自営業（商工サービス業）（83.6%）となっている。

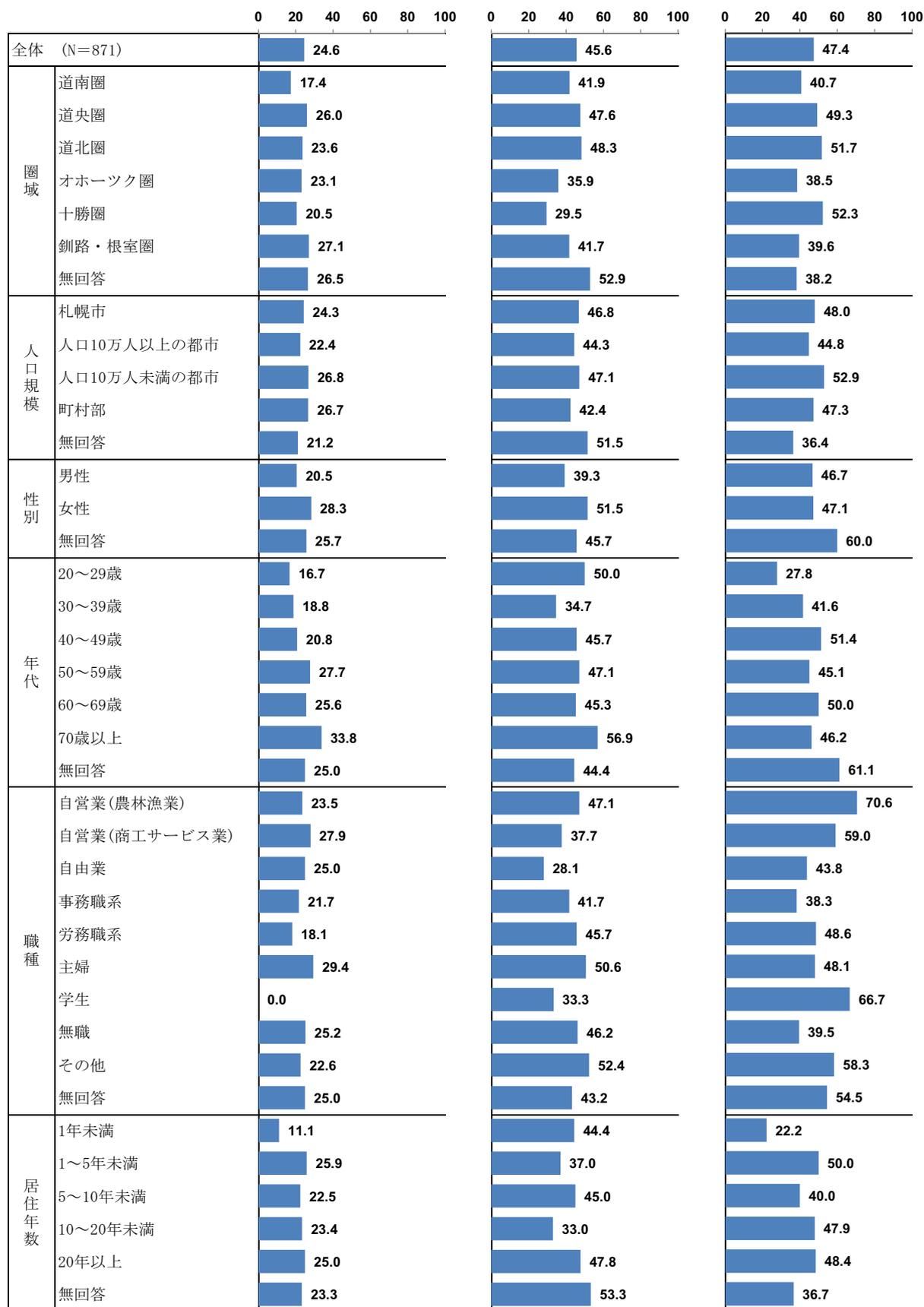
**【居住年数別】**

「買い物の際にはマイバッグを持ち歩き、省包装の商品を選ぶ」については、1 年未満（88.9%）が最も割合が高く、次いで 10～20 年未満（81.9%）となっている。「使っていない照明をこまめに消灯する」については、20 年以上（80.3%）が最も割合が高く、次いで 1 年未満（77.8%）となっている。

テレビの視聴時間の短縮

使っていない電化製品のプラグ  
をコンセントから抜く

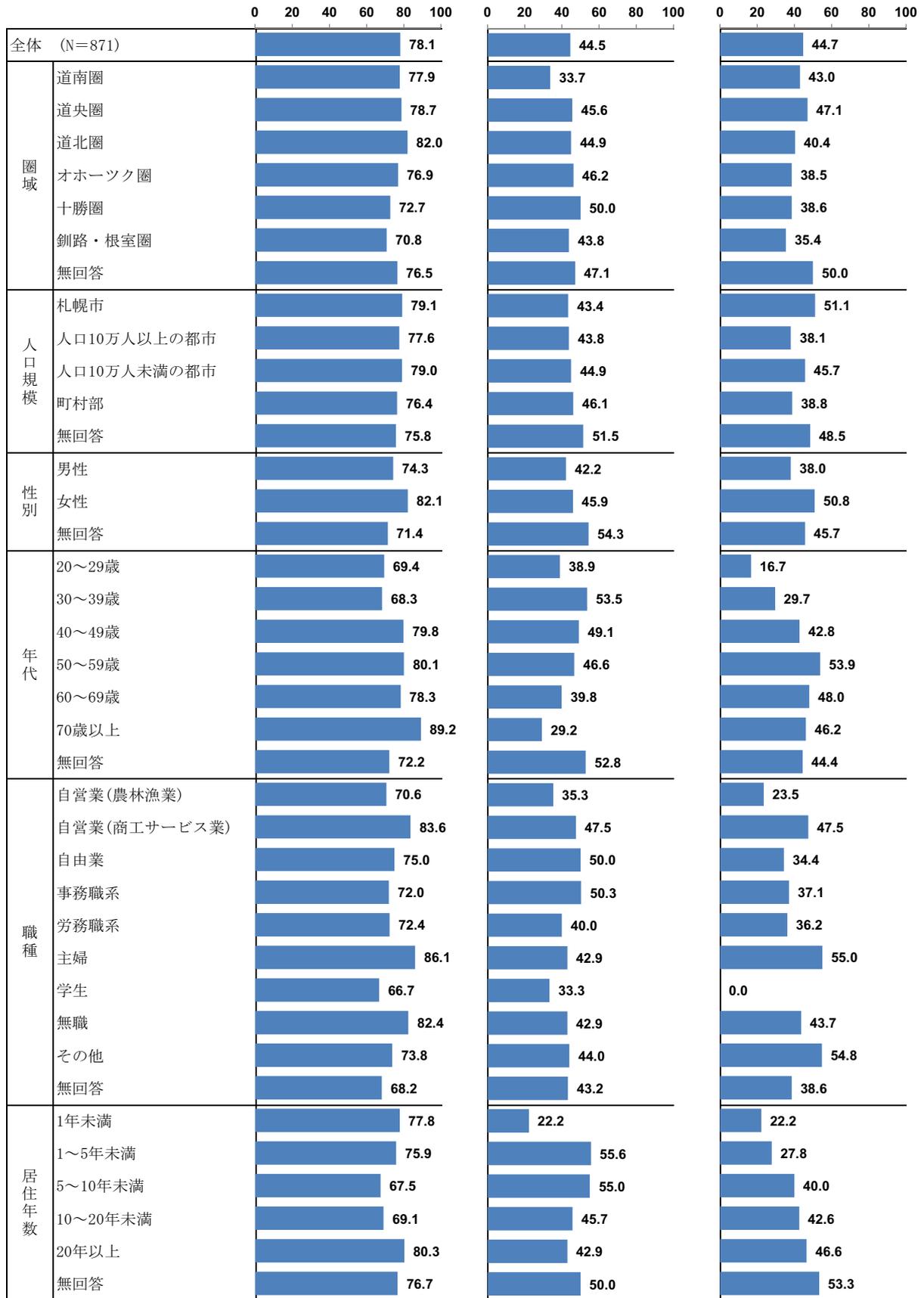
白熱電球を電球型蛍光灯や  
LEDに取り替える



使っていない照明をこまめに  
消灯する

使用していないときパソコンの  
電源を切る

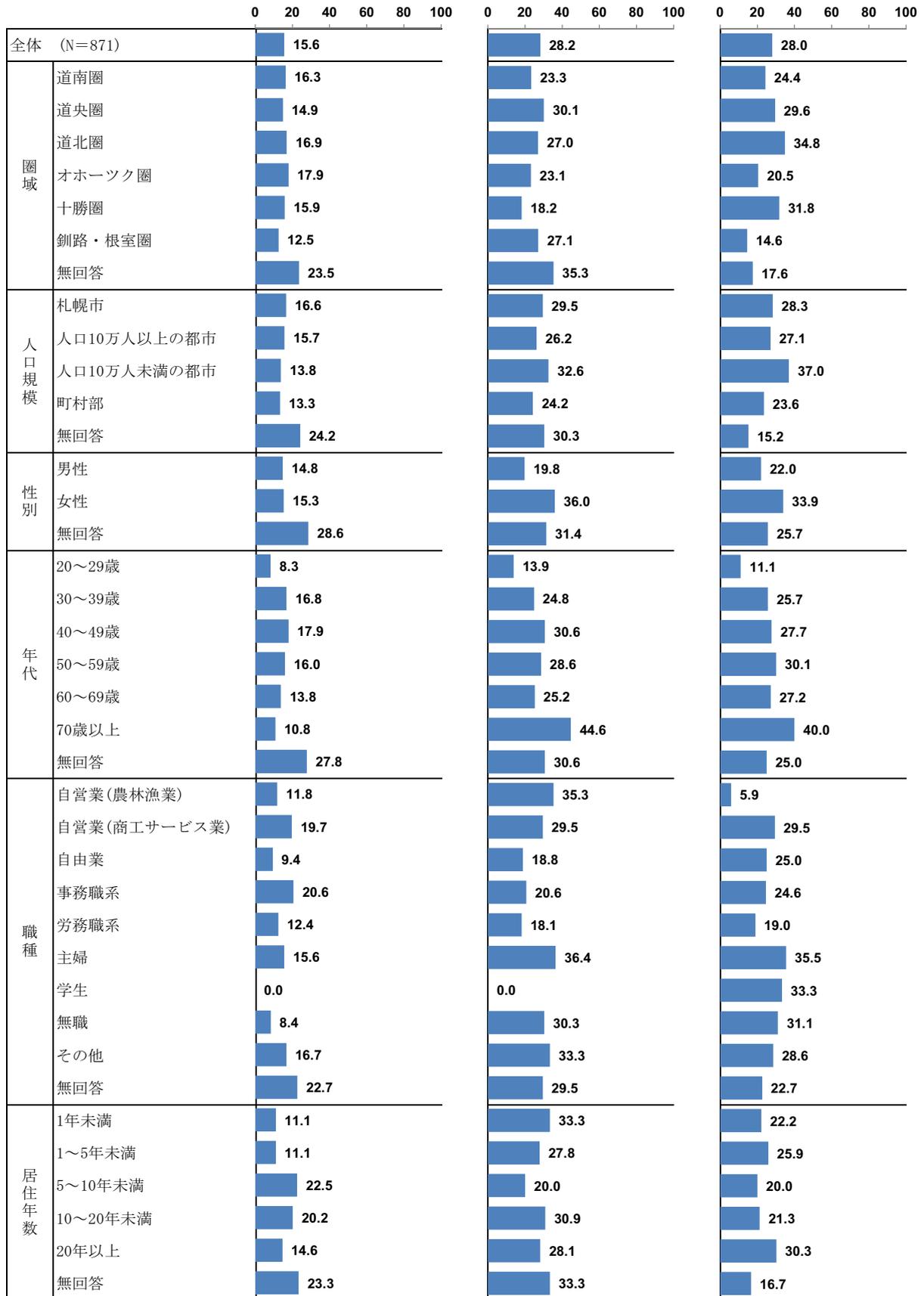
暖房の設定温度を低くする



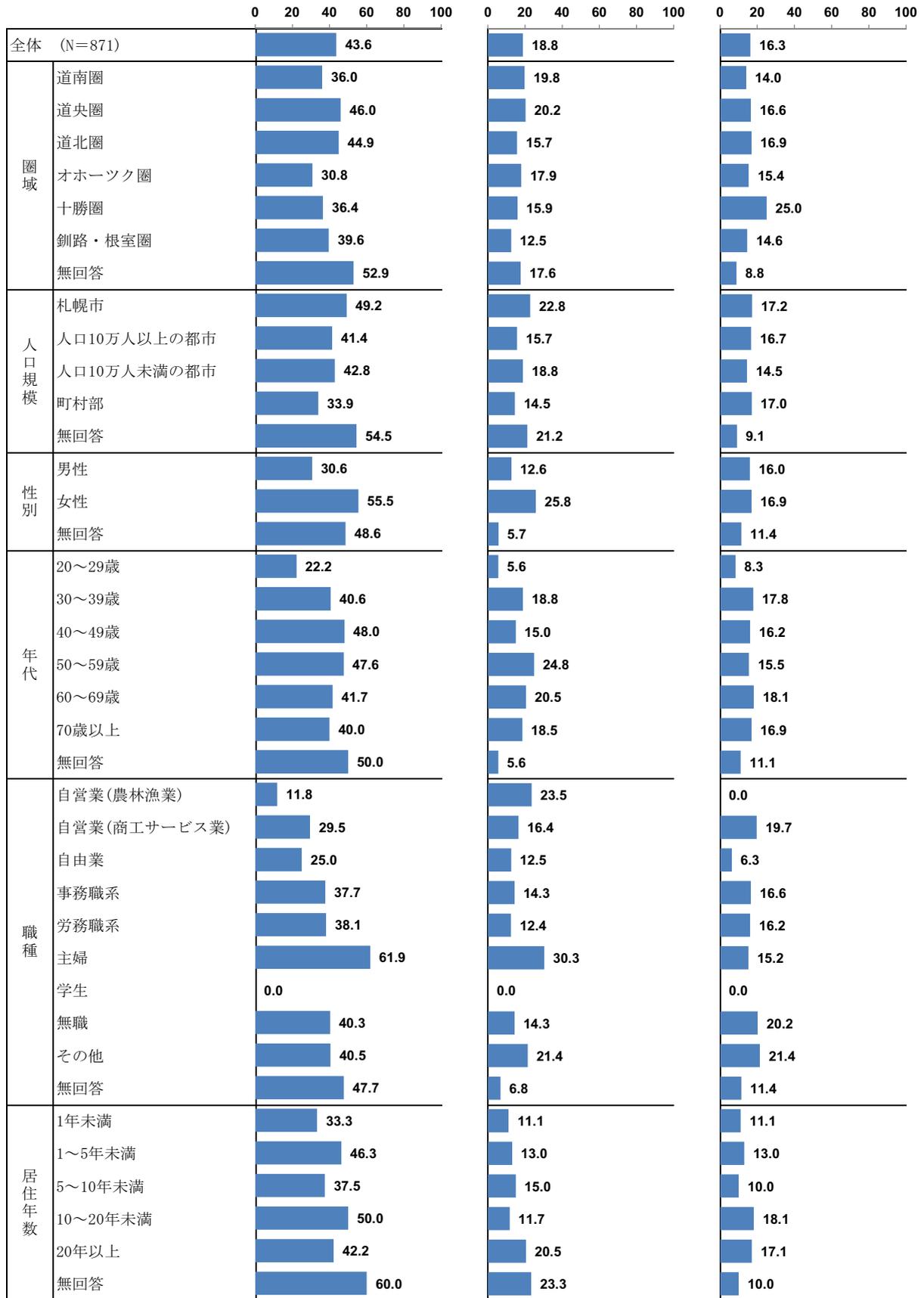
冷房の設定温度を高くする

冷蔵庫にものを詰め込みすぎない

冷蔵庫の扉の開閉回数を少なくする



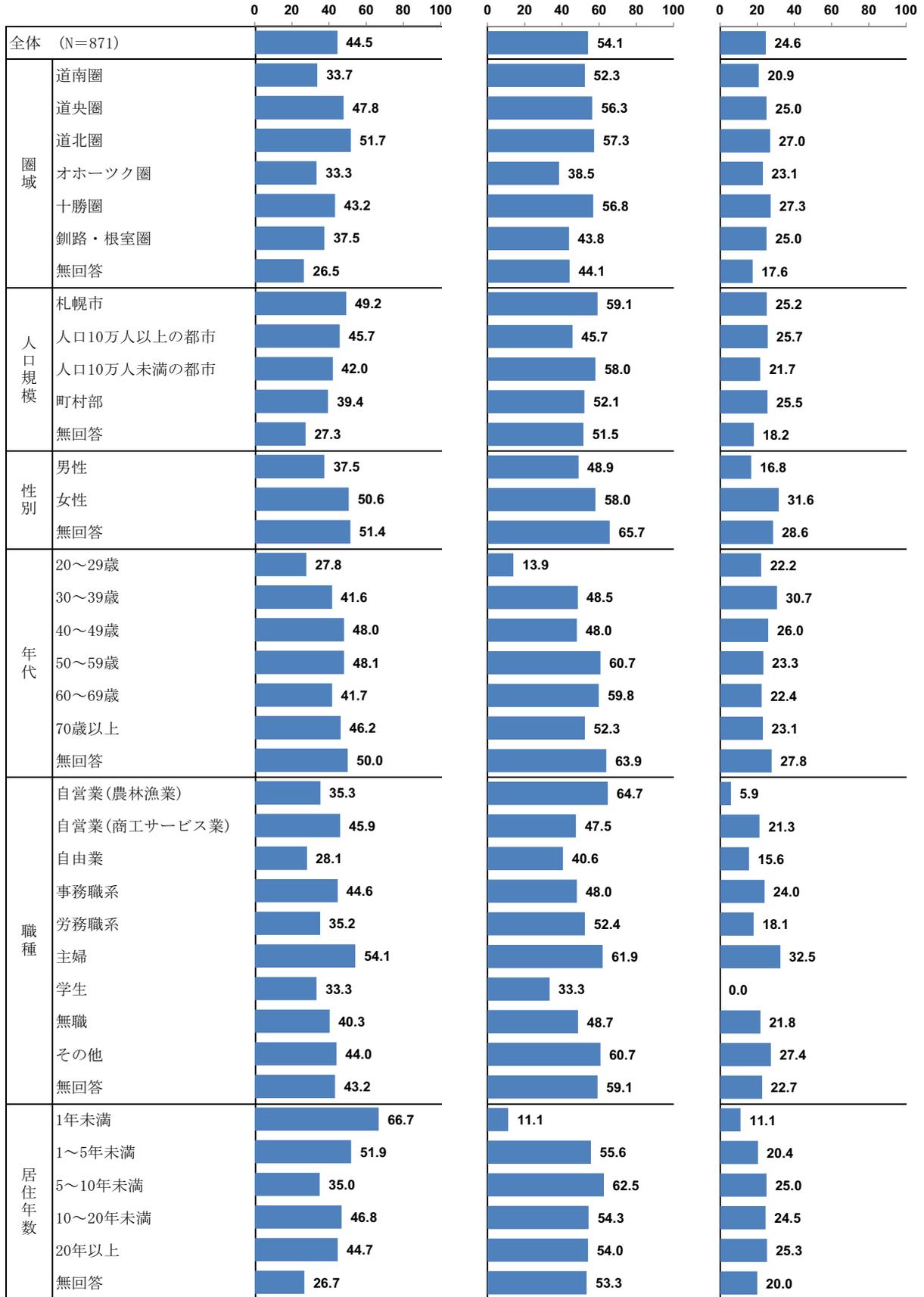
ジャー炊飯器の「保温」をしない    食器洗いのお湯の温度を下げる    天井から床までのカーテンを使用する



暖房便座の設定温度は控えめにし、使わないときはフタを閉める

電化製品などを買うとき、買い換えるときには、省エネルギータイプのものを選ぶ

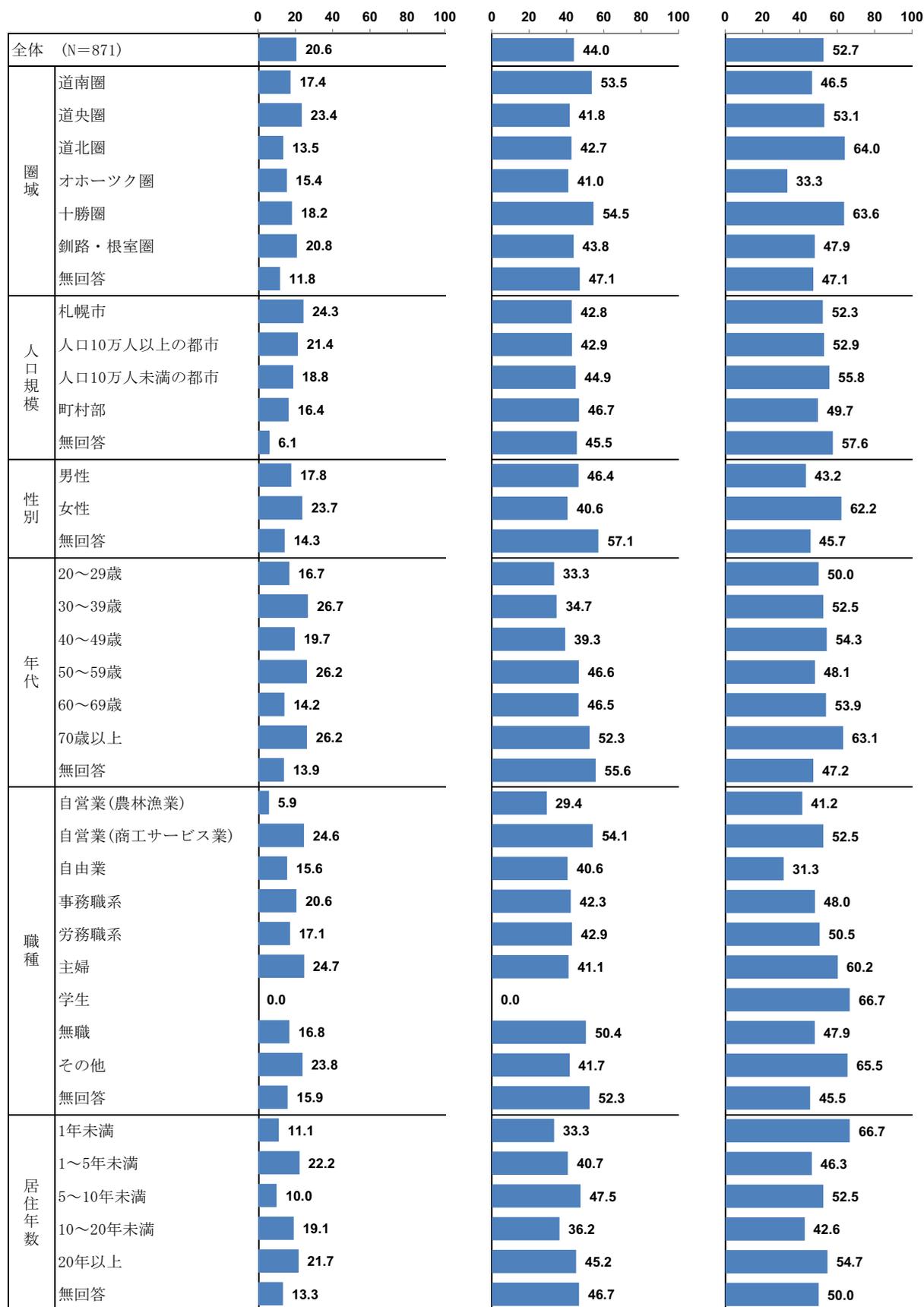
お風呂は間隔をおかずに入り追い炊きをしない



シャワーの使用時間を短くする

こまめに節水をする

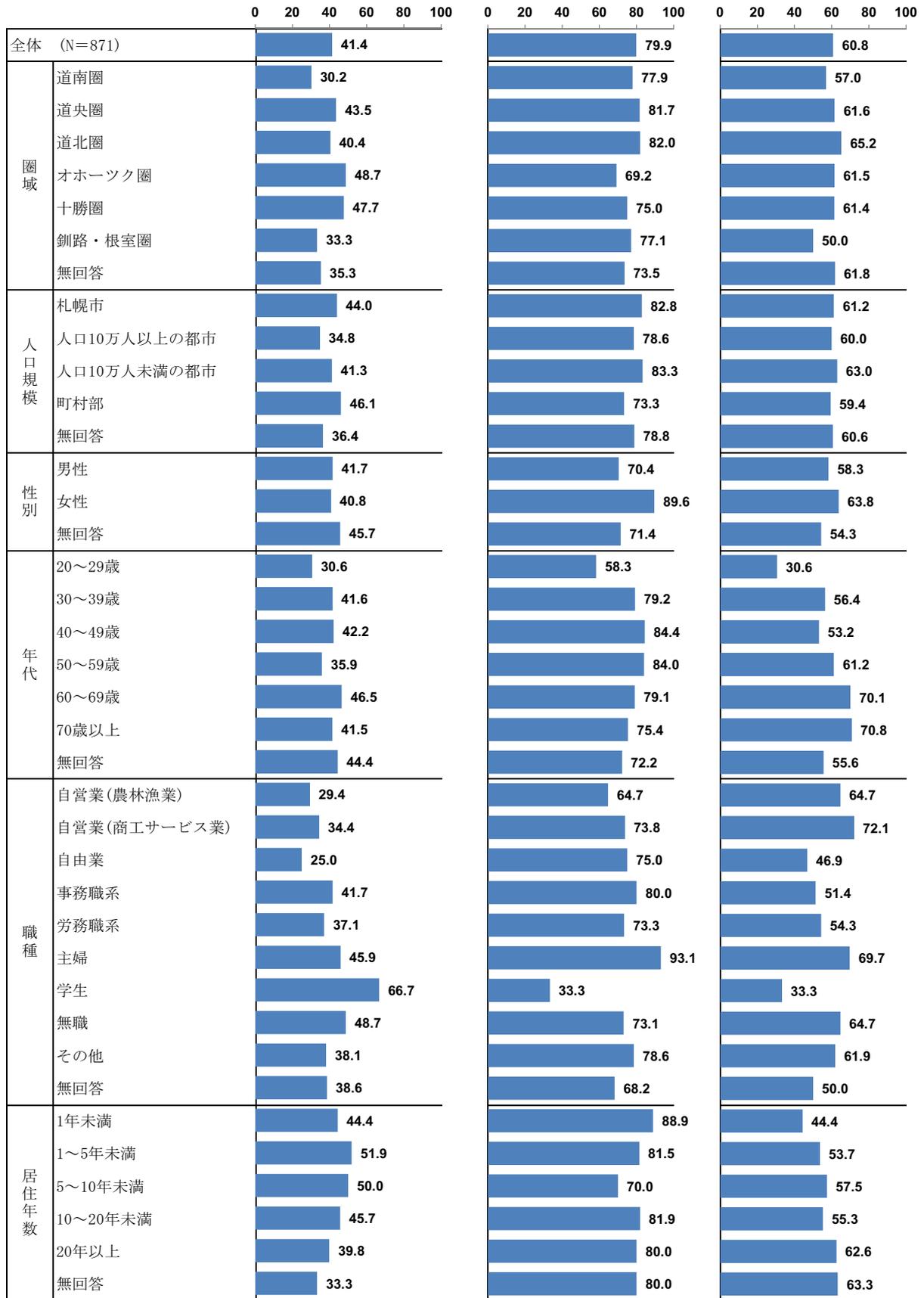
洗濯するときはまとめて洗う



お風呂の残り湯を洗濯に再利用する

買い物際にはマイバッグを持ち歩き、省包装の商品を選ぶ

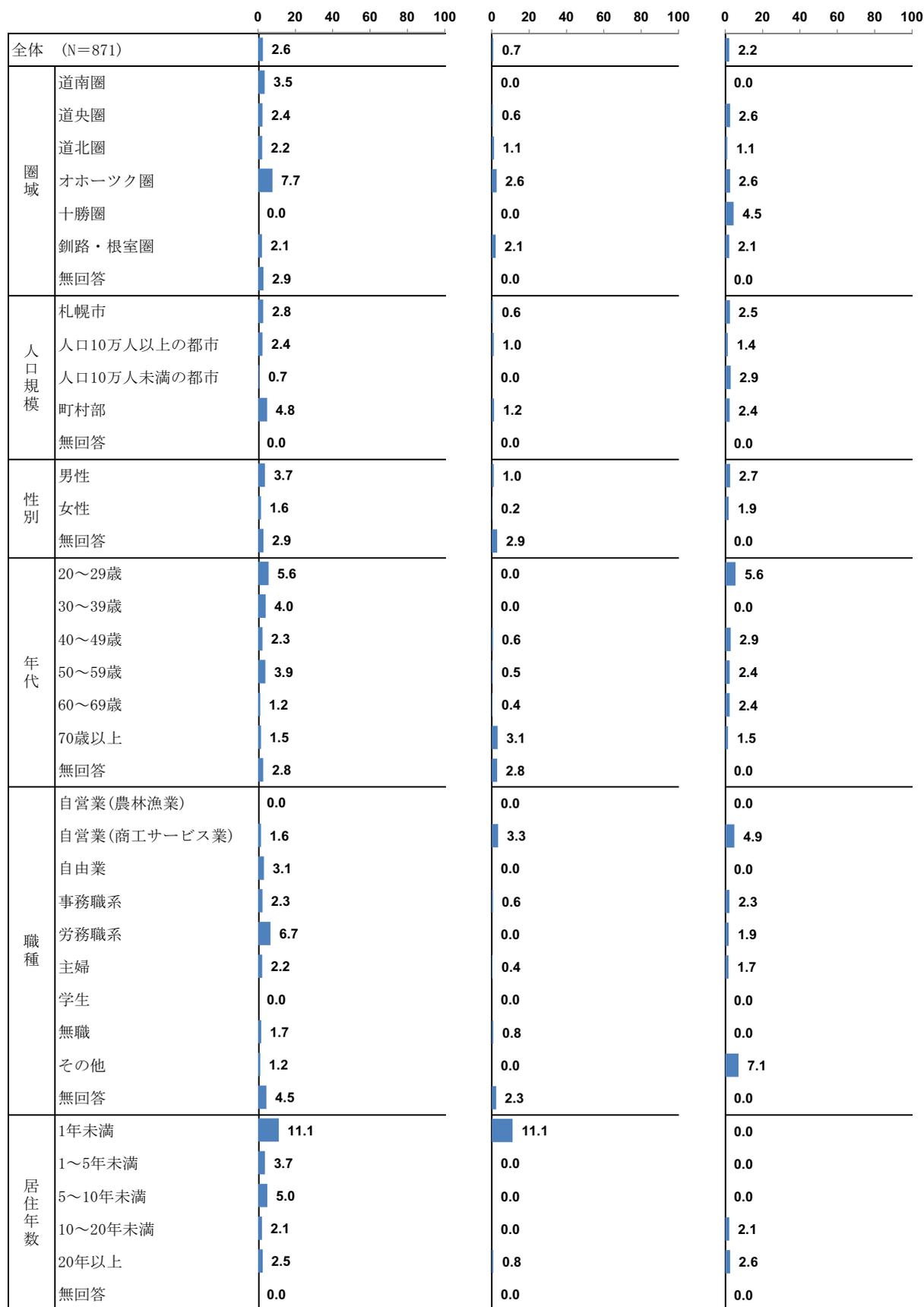
ごみの削減、リサイクルを心がける



上記の取組のいくつかは知っているが、特に何も行ってない

何をやればよいか分からないので、特に何も行ってない

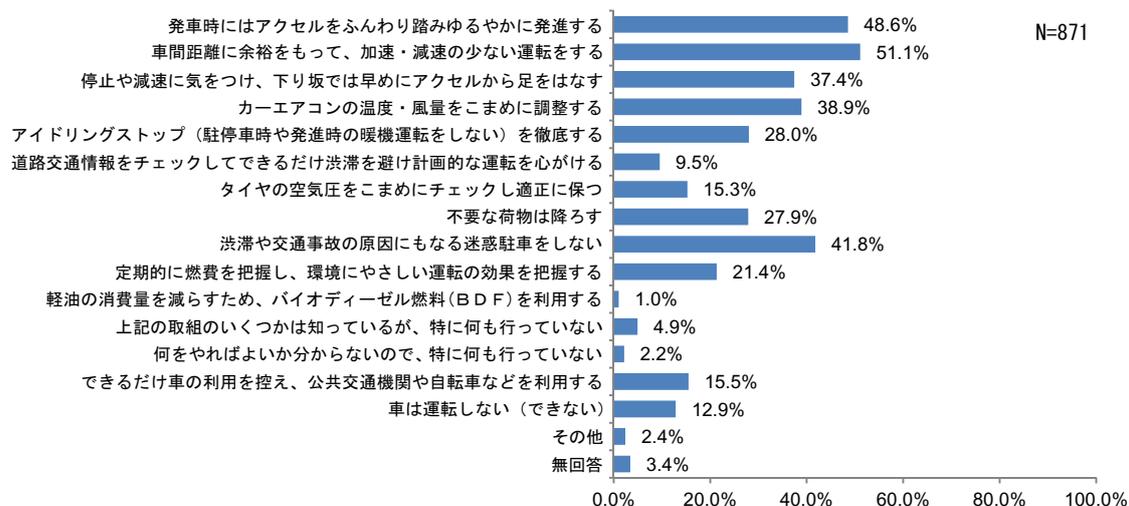
その他



無回答

		0	20	40	60	80	100
全体 (N=871)		0.6					
圏域	道南圏	1.2					
	道央圏	0.6					
	道北圏	0.0					
	オホーツク圏	0.0					
	十勝圏	0.0					
	釧路・根室圏	0.0					
	無回答	2.9					
	人口規模	札幌市	0.6				
人口10万人以上の都市		0.5					
人口10万人未満の都市		0.0					
町村部		0.6					
無回答		3.0					
性別	男性	0.5					
	女性	0.7					
	無回答	0.0					
年代	20～29歳	0.0					
	30～39歳	1.0					
	40～49歳	0.0					
	50～59歳	0.0					
	60～69歳	1.6					
	70歳以上	0.0					
	無回答	0.0					
職種	自営業(農林漁業)	5.9					
	自営業(商工サービス業)	1.6					
	自由業	0.0					
	事務職系	0.6					
	労務職系	0.0					
	主婦	0.0					
	学生	0.0					
	無職	0.0					
	その他	1.2					
	無回答	2.3					
	居住年数	1年未満	0.0				
1～5年未満		0.0					
5～10年未満		2.5					
10～20年未満		0.0					
20年以上		0.5					
無回答		3.3					

問2 地球温暖化に影響する原因の1つとして、自動車からの排気ガスの増加が心配されています。あなたが車を運転するときに、地球温暖化防止のために心がけている取組みを次の中からいくつかでもお選びください。



### 【全体】

「車間距離に余裕をもって、加速・減速の少ない運転をする」（51.1%）と答えた人の割合が最も高く、次いで「発車時にはアクセルをふんわり踏みゆるやかに発進する」（48.6%）、「渋滞や交通事故の原因にもなる迷惑駐車をしない」（41.8%）の順となっている。

### 【圏域別】

「車間距離に余裕をもって、加速・減速の少ない運転をする」については、十勝圏（63.6%）が最も割合が高く、次いで道北圏（57.3%）となっている。「発車時にはアクセルをふんわり踏みゆるやかに発進する」については、道北圏（58.4%）が最も割合が高く、次いで十勝圏（54.5%）となっている。

### 【人口規模別】

「車間距離に余裕をもって、加速・減速の少ない運転をする」については、人口10万人未満の都市（58.0%）が最も割合が高く、次いで町村部（57.6%）となっている。「発車時にはアクセルをふんわり踏みゆるやかに発進する」については、人口10万人未満の都市（50.7%）が最も割合が高く、次いで町村部（49.1%）となっている。

### 【性別】

「車間距離に余裕をもって、加速・減速の少ない運転をする」については、男性54.8%、女性47.1%となっており、「発車時にはアクセルをふんわり踏みゆるやかに発進する」については、男性54.3%、女性42.9%となっている。

### 【年代別】

「車間距離に余裕をもって、加速・減速の少ない運転をする」については、50～59歳（56.3%）が最も割合が高く、次いで60～69歳（54.3%）となっている。「発車時にはアクセルをふんわり踏みゆるやかに発進する」については、40～49歳（50.9%）が最も割合が高く、次いで50～59歳（50.5%）となっている。

### 【職種別】

「車間距離に余裕をもって、加速・減速の少ない運転をする」については、自営業（農林漁業）（64.7%）が最も割合が高く、次いで無職（58.0%）となっている。「発車時にはアクセルをふんわり踏みゆるやかに発進する」については、自営業（商工サービス業）（55.7%）が最も割合が高く、次いで無職（53.8%）となっている。

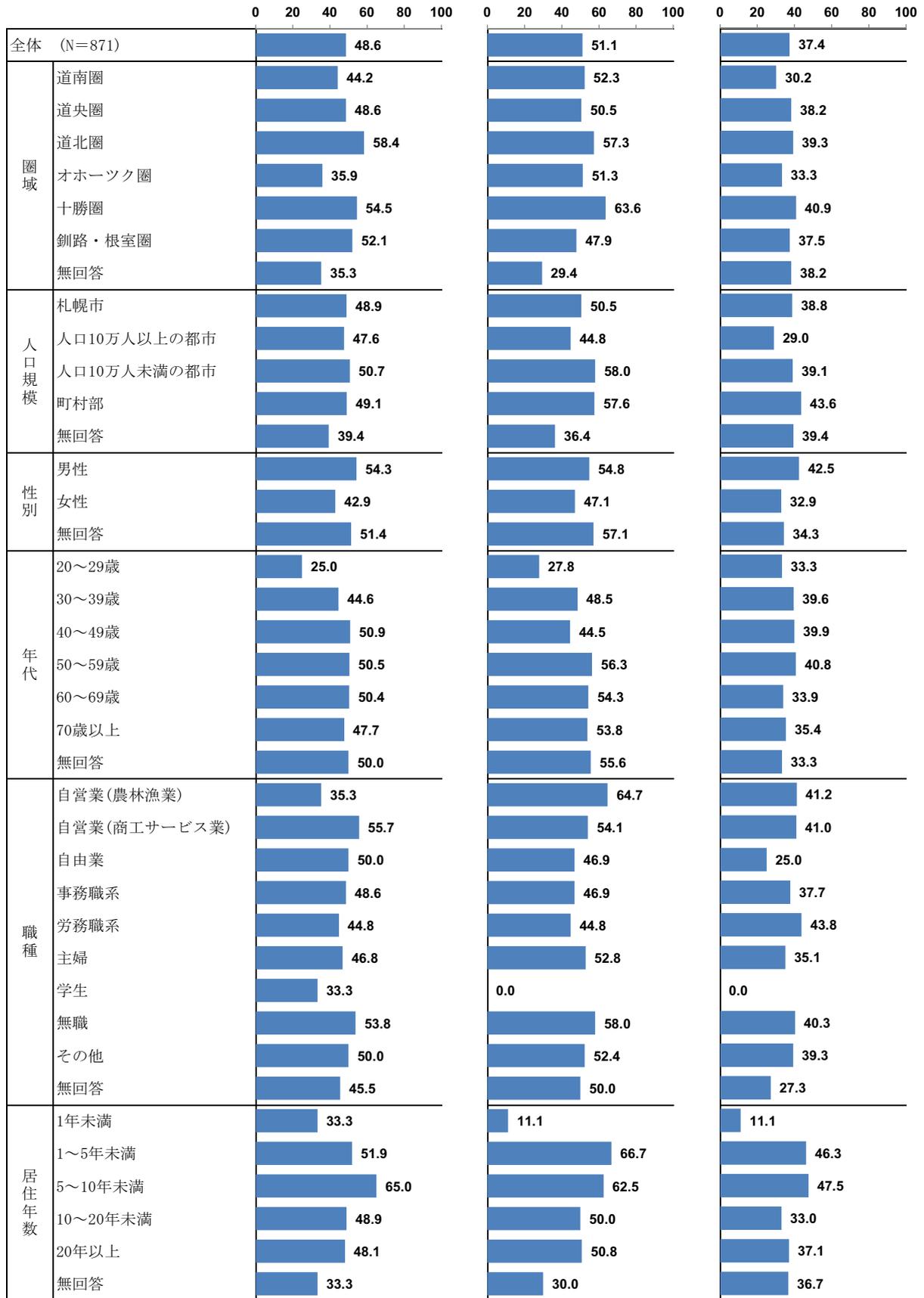
### 【居住年数別】

「車間距離に余裕をもって、加速・減速の少ない運転をする」については、1～5年未満（66.7%）が最も割合が高く、次いで5～10年未満（62.5%）となっている。「発車時にはアクセルをふんわり踏みゆるやかに発進する」については、5～10年未満（65.0%）が最も割合が高く、次いで1～5年未満（51.9%）となっている。

発車時にはアクセルをふんわり  
踏みゆるやかに発進する

車間距離に余裕をもって、  
加速・減速の少ない運転を  
する

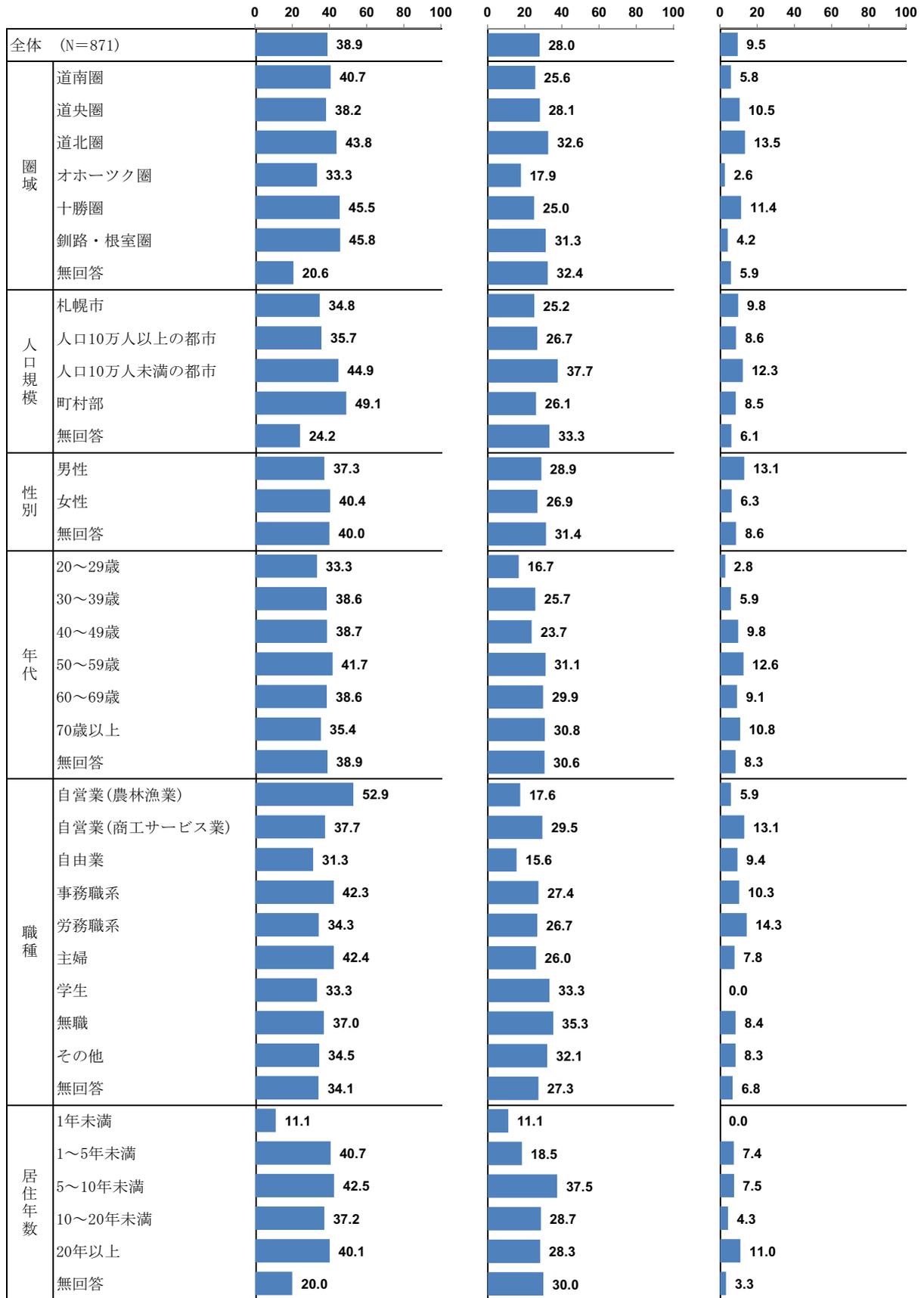
停止や減速に気をつけ、下り坂  
では早めにアクセルから足を  
はなす



カーエアコンの温度・風量を  
こまめに調整する

アイドリングストップ（駐停車  
時や発進時の暖機運転をしな  
い）を徹底する

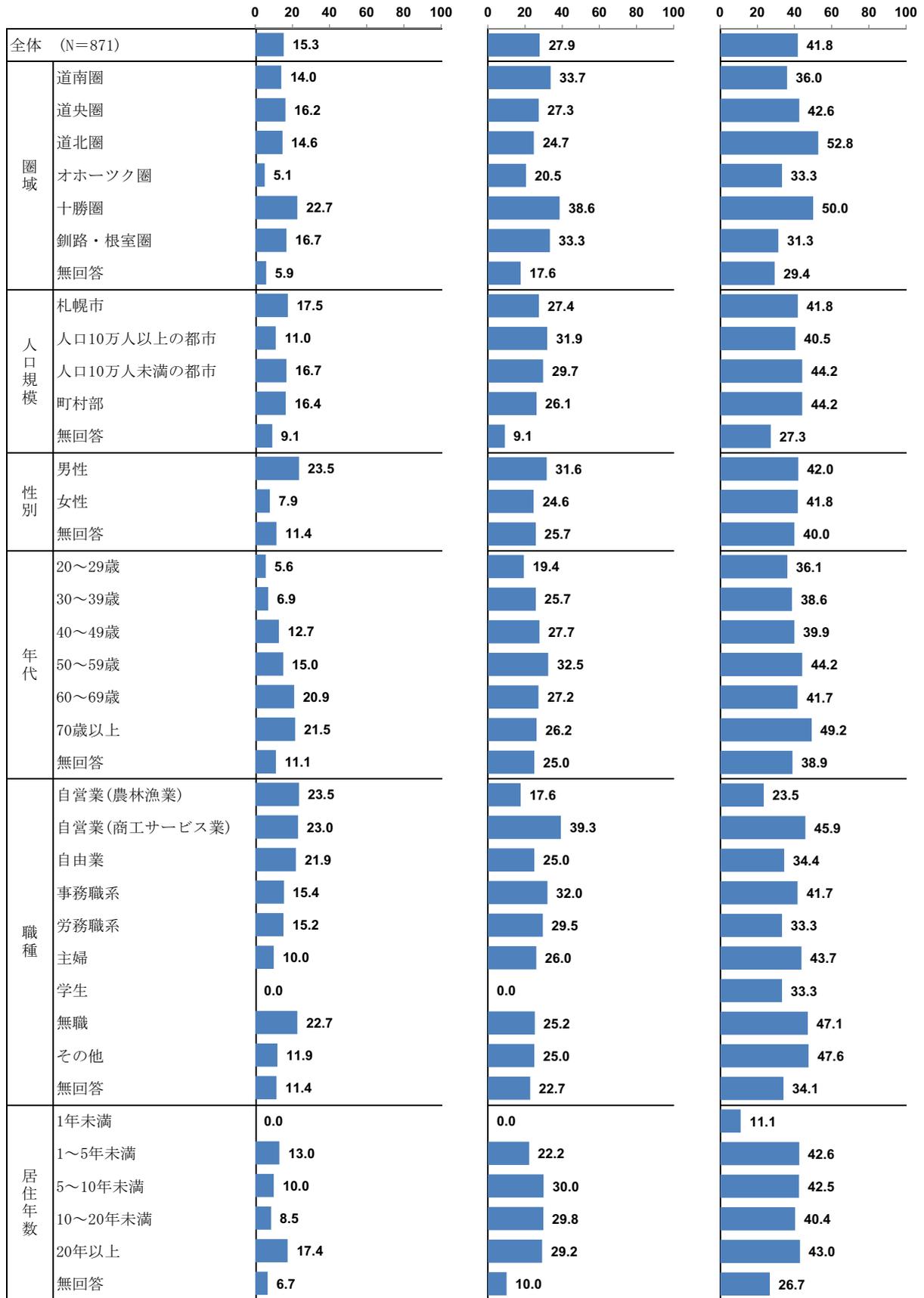
道路交通情報をチェックして  
できるだけ渋滞を避け計画的  
な運転を心がける



タイヤの空気圧をこまめに  
チェックし適正に保つ

不要な荷物は降ろす

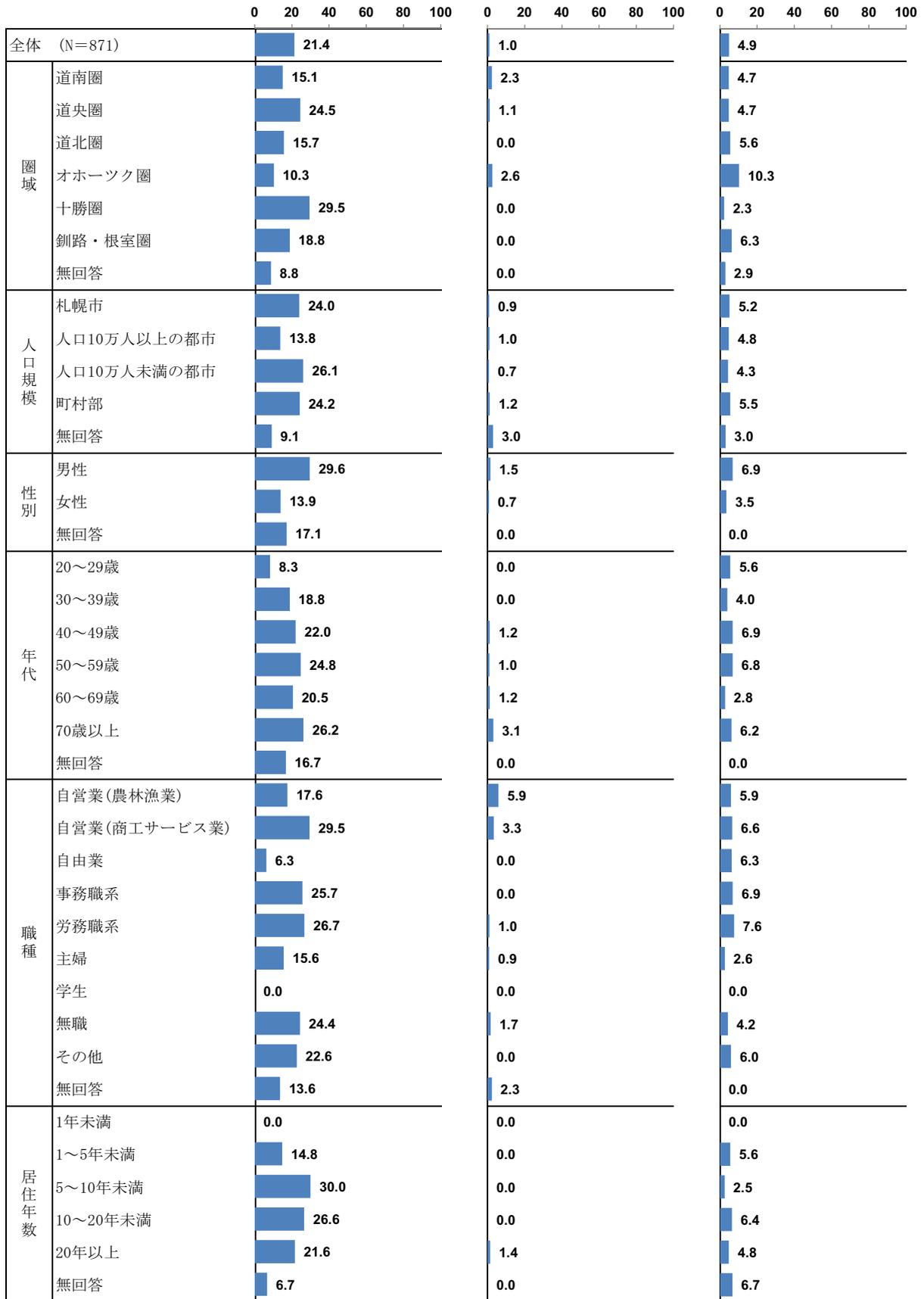
渋滞や交通事故の原因にもなる  
迷惑駐車をしない



定期的に燃費を把握し、環境にやさしい運転の効果を把握する

軽油の消費量を減らすため、バイオディーゼル燃料(BD F)を利用する

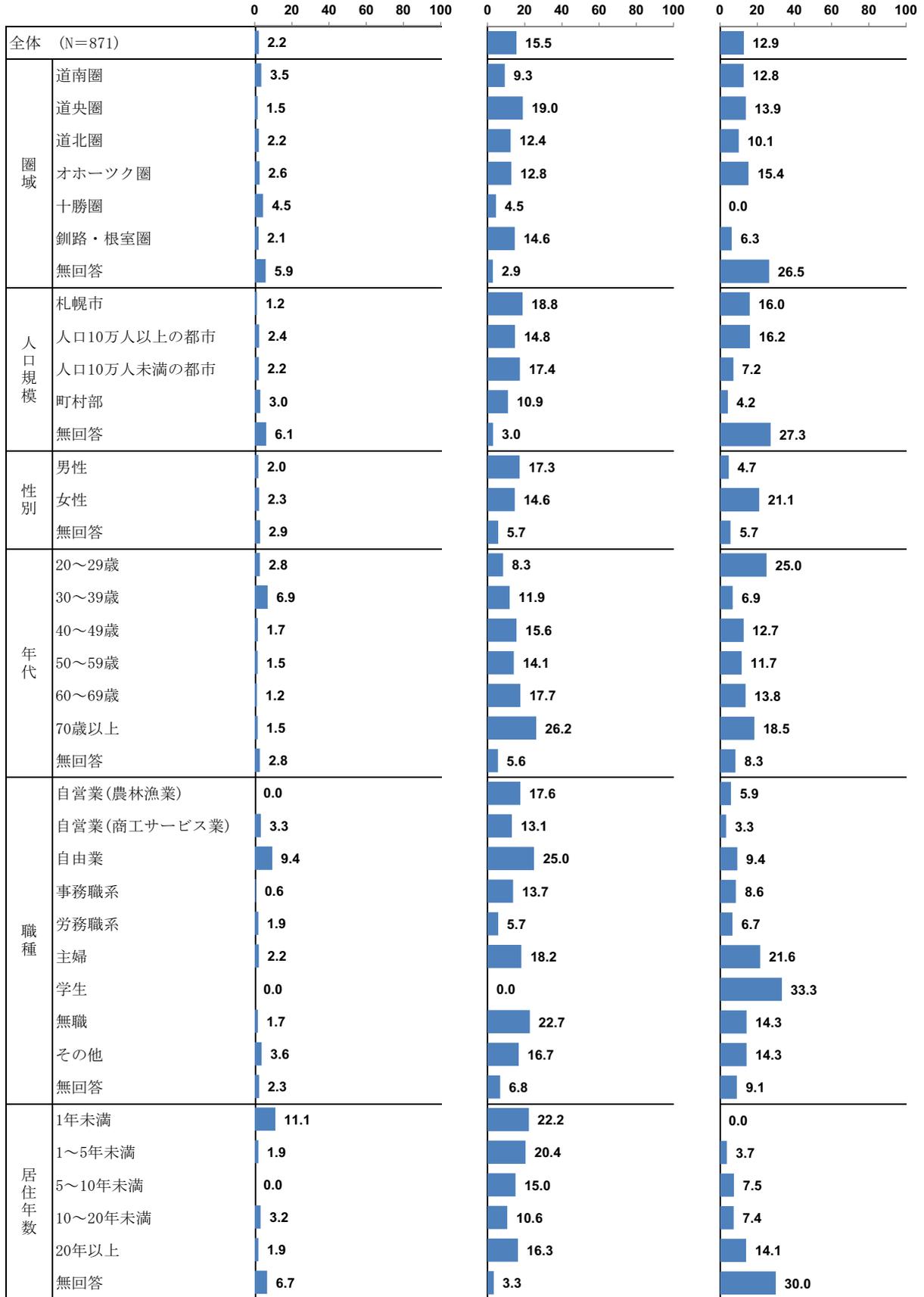
上記の取組のいくつかは知っているが、特に何も行っていない



何をやればよいか分からないので、特に何も行っていません

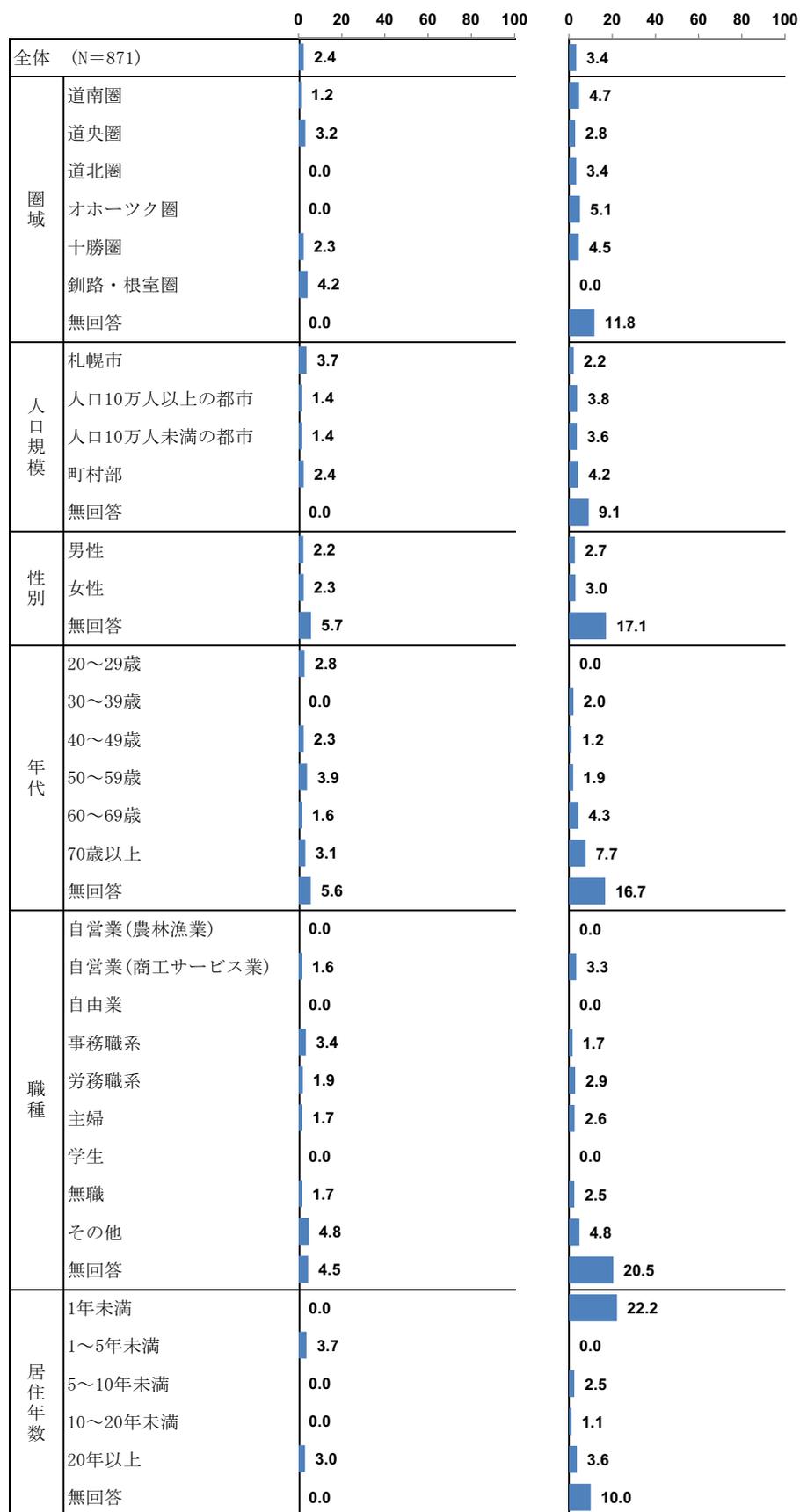
できるだけ車の利用を控え、公共交通機関や自転車などを利用する

車は運転しない（できない）

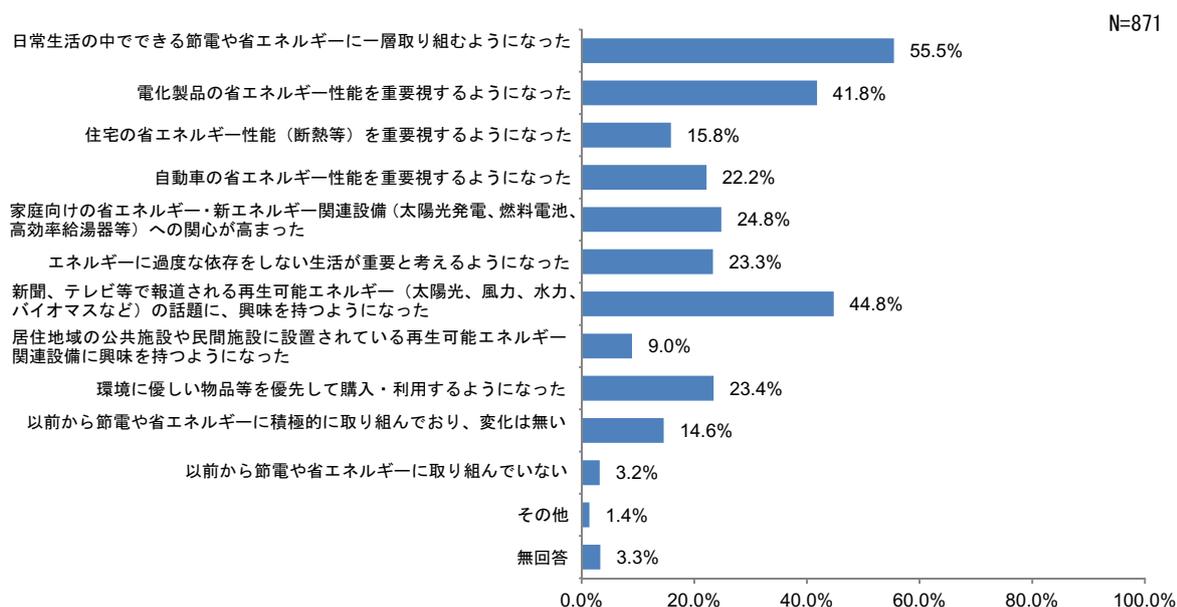


その他

無回答



問3 東日本大震災の後、さらなる節電や省エネルギーの取組が求められています。あなたの行動や意識には変化がありましたか。あてはまるものを次の中からいくつでもお選びください。



#### 【全体】

「日常生活の中でできる節電や省エネルギーに一層取り組むようになった」（55.5%）と答えた人の割合が最も高く、次いで「新聞、テレビ等で報道される再生可能エネルギー（太陽光、風力、水力、バイオマスなど）の話題に、興味を持つようになった」（44.8%）、「電化製品の省エネルギー性能を重要視するようになった」（41.8%）の順となっている。

#### 【圏域別】

「日常生活の中でできる節電や省エネルギーに一層取り組むようになった」については、道北圏（59.6%）が最も割合が高く、次いで十勝圏（56.8%）となっている。「新聞、テレビ等で報道される再生可能エネルギー（太陽光、風力、水力、バイオマスなど）の話題に、興味を持つようになった」については、釧路・根室圏（52.1%）が最も割合が高く、次いでオホーツク圏（51.3%）となっている。

#### 【人口規模別】

「日常生活の中でできる節電や省エネルギーに一層取り組むようになった」については、町村部（58.8%）が最も割合が高く、次いで札幌市（56.9%）となっている。「新聞、テレビ等で報道される再生可能エネルギー（太陽光、風力、水力、バイオマスなど）の話題に、興味を持つようになった」については、人口10万人未満の都市（49.3%）が最も割合が高く、次いで町村部（47.3%）となっている。

#### 【性別】

「日常生活の中でできる節電や省エネルギーに一層取り組むようになった」については、男性51.1%、女性59.2%となっており、「新聞、テレビ等で報道される再生可能エネルギー（太陽光、風力、水力、バイオマスなど）の話題に、興味を持つようになった」については、男性46.2%、女性43.9%となっている。

#### 【年代別】

「日常生活の中でできる節電や省エネルギーに一層取り組むようになった」については、70歳以上（67.7%）が最も割合が高く、次いで60～69歳（60.6%）となっている。「新聞、テレビ等で報道される再生可能エネルギー（太陽光、風力、水力、バイオマスなど）の話題に、興味を持つようになった」については、60～69歳（57.5%）が最も割合が高く、次いで70歳以上（49.2%）となっている。

**【職種別】**

「日常生活の中でできる節電や省エネルギーに一層取り組むようになった」については、主婦（65.4%）が最も割合が高く、次いで自営業（農林漁業）（64.7%）となっている。「新聞、テレビ等で報道される再生可能エネルギー（太陽光、風力、水力、バイオマスなど）の話題に、興味を持つようになった」については、無職（53.8%）が最も割合が高く、次いで自営業（商工サービス業）（52.5%）となっている。

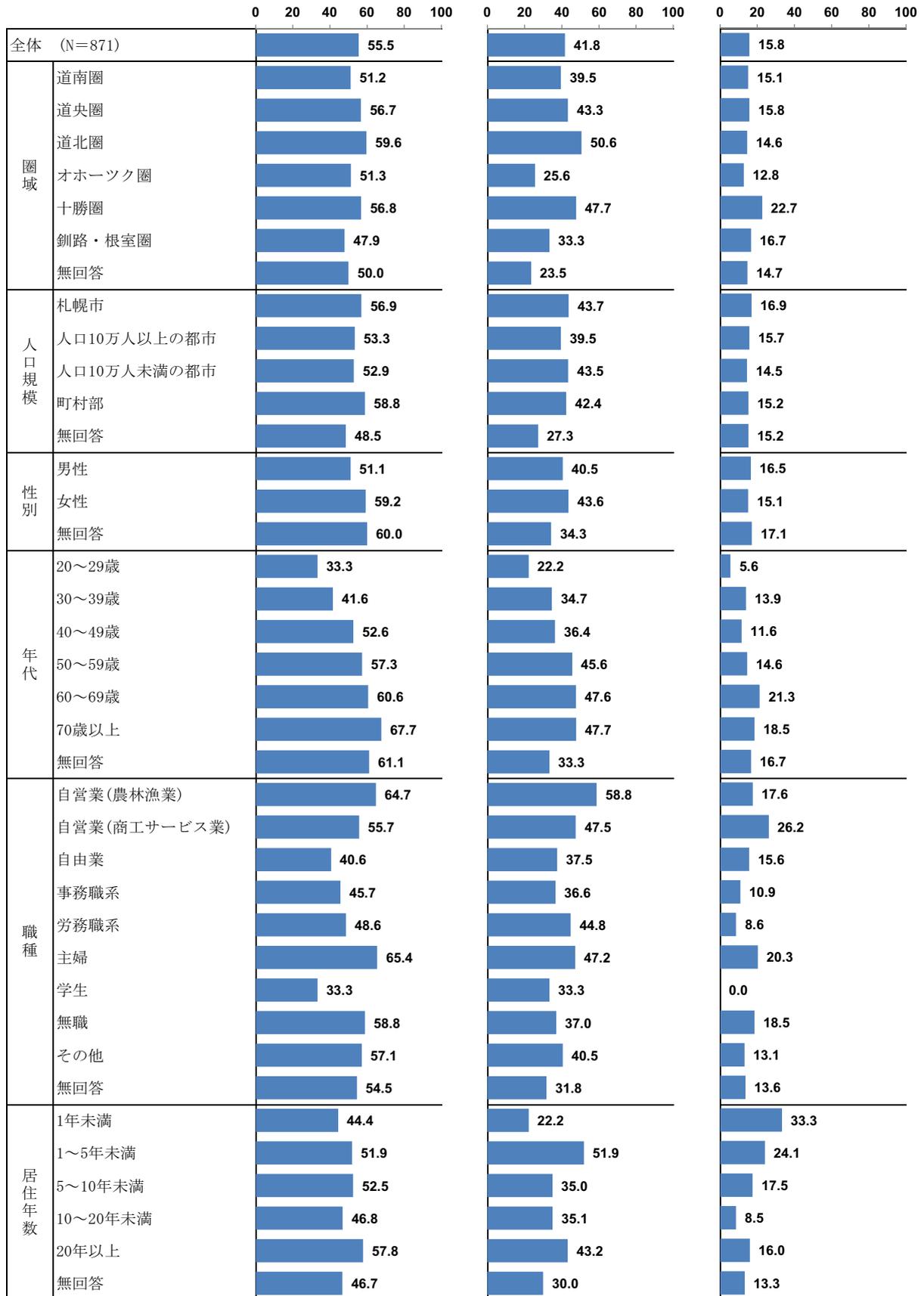
**【居住年数別】**

「日常生活の中でできる節電や省エネルギーに一層取り組むようになった」については、20年以上（57.8%）が最も割合が高く、次いで5～10年未満（52.5%）となっている。「新聞、テレビ等で報道される再生可能エネルギー（太陽光、風力、水力、バイオマスなど）の話題に、興味を持つようになった」については、1～5年未満（51.9%）が最も割合が高く、次いで5～10年未満（50.0%）となっている。

日常生活の中でできる節電や省エネルギーに一層取り組むようになった

電化製品の省エネルギー性能を重要視するようになった

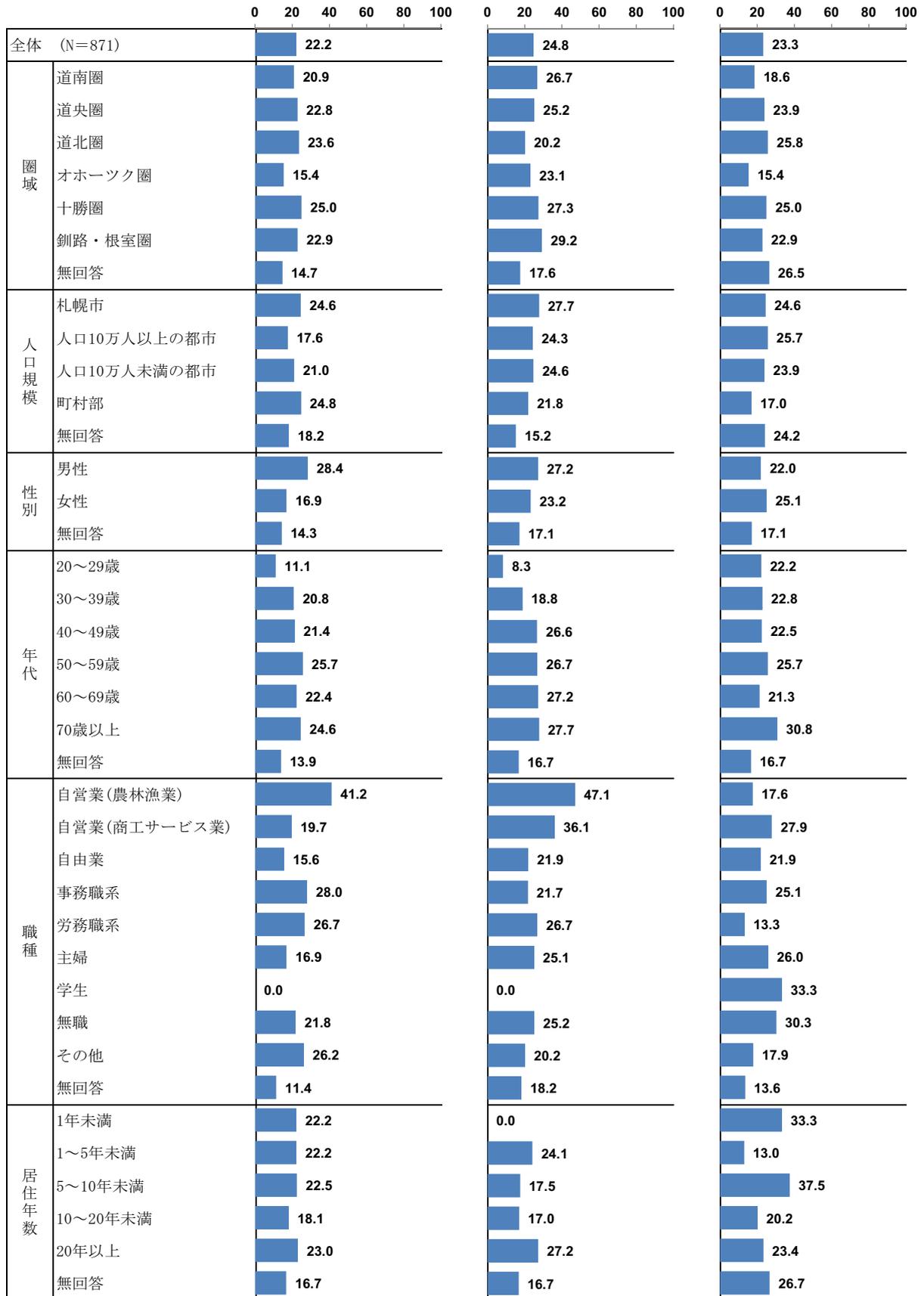
住宅の省エネルギー性能（断熱等）を重要視するようになった



自動車の省エネルギー性能を重要視するようになった

家庭向けの省エネルギー・新エネルギー関連設備（太陽光発電、燃料電池、高効率給湯器等）への関心が高まった

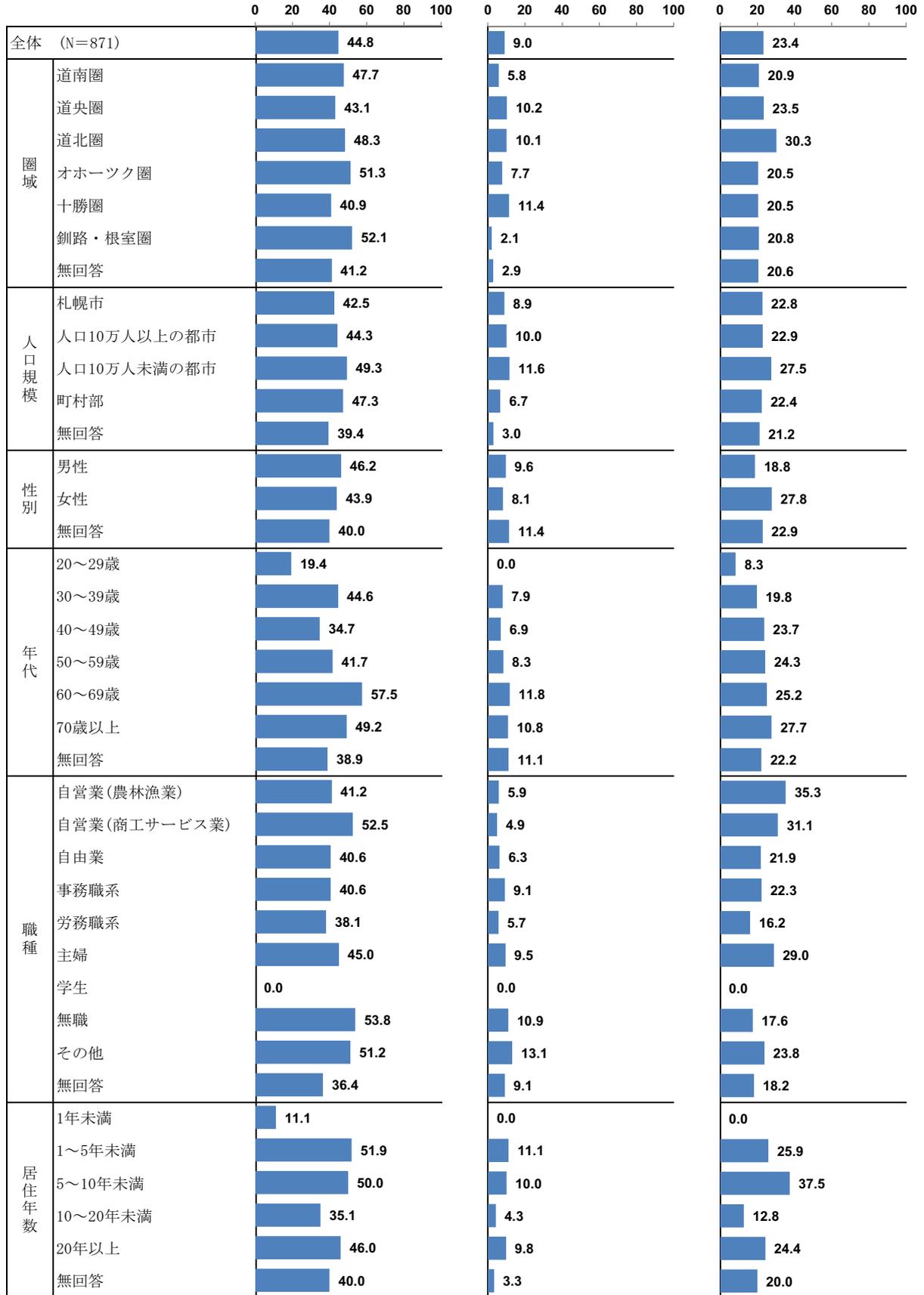
エネルギーに過度な依存をしない生活が重要と考えるようになった



新聞、テレビ等で報道される再生可能エネルギー（太陽光、風力、水力、バイオマスなど）の話題に、興味を持つようになった

居住地域の公共施設や民間施設に設置されている再生可能エネルギー関連設備に興味を持つようになった

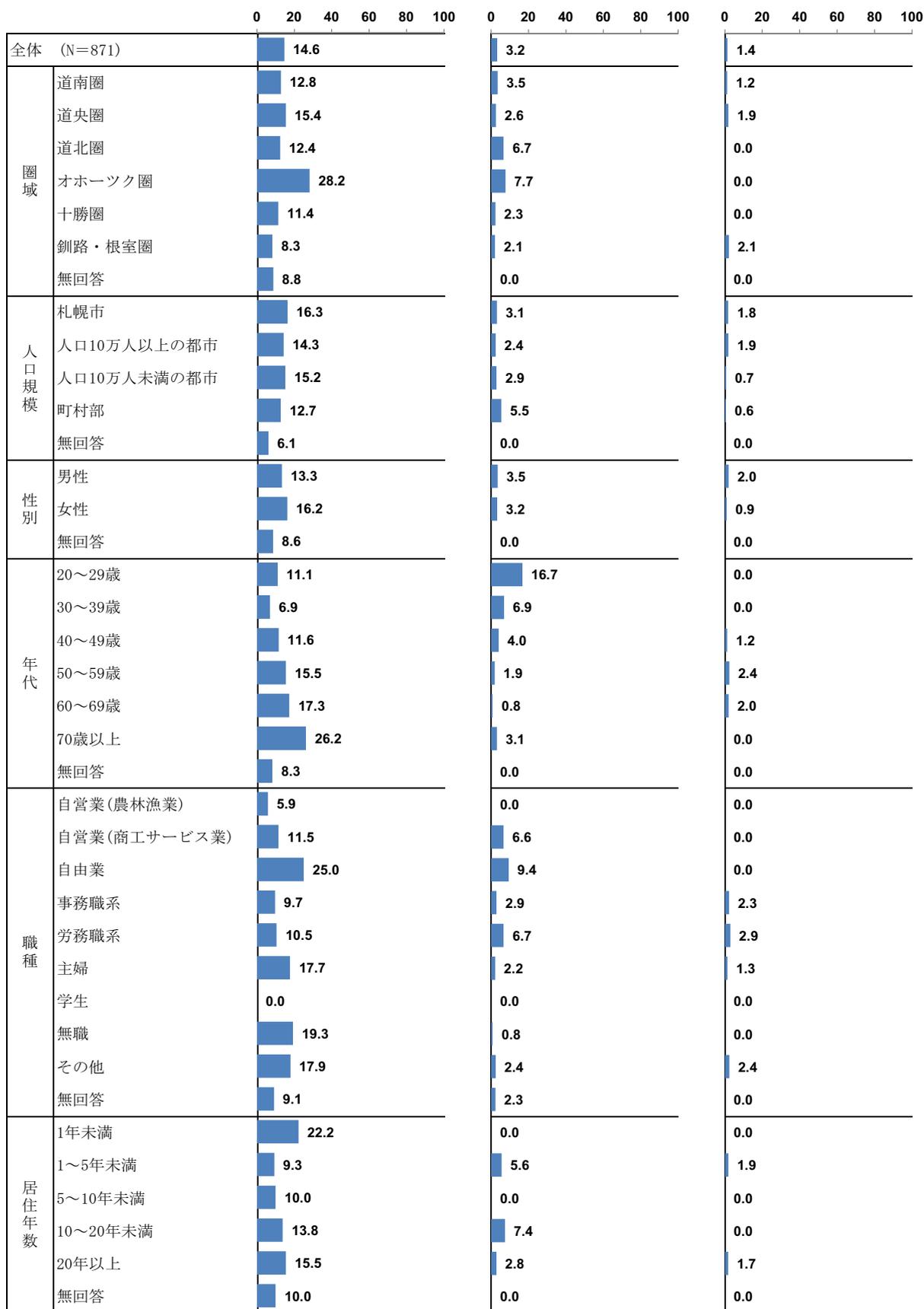
環境に優しい物品等を優先して購入・利用するようになった



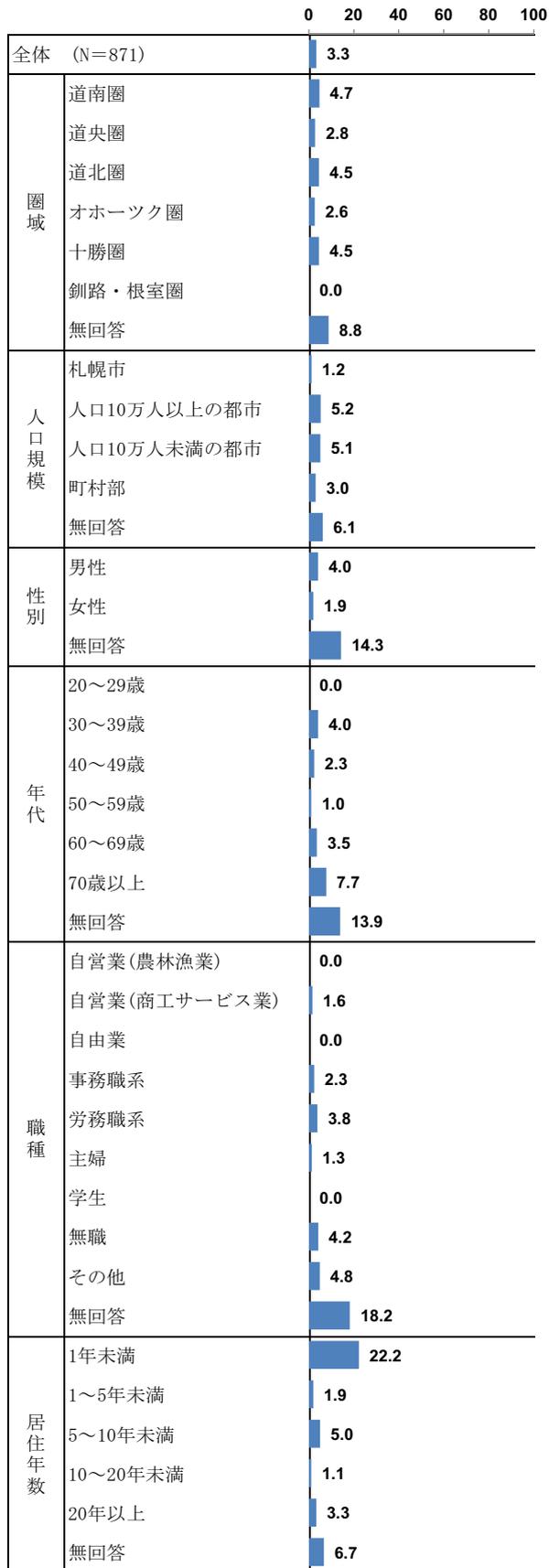
以前から節電や省エネルギーに積極的に取り組んでおり、変化は無い

以前から節電や省エネルギーに取り組んでいない

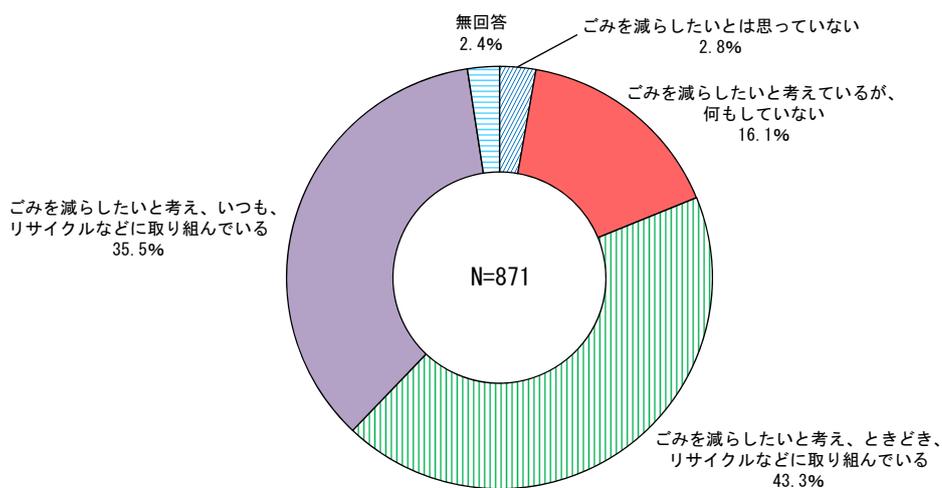
その他



無回答



問4 あなたは、ご自身の家庭からでるごみの減量化について、どのように考え、取り組んでいますか。次の中から1つだけお選びください。



#### 【全体】

「ごみを減らしたいと考え、ときどき、リサイクルなどに取り組んでいる」(43.3%)と答えた人の割合が最も高く、次いで「ごみを減らしたいと考え、いつも、リサイクルなどに取り組んでいる」(35.5%)、「ごみを減らしたいと考えているが、何もしていない」(16.1%)の順となっている。

#### 【圏域別】

「ごみを減らしたいと考え、ときどき、リサイクルなどに取り組んでいる」については、十勝圏(47.7%)が最も割合が高く、次いで道北圏(44.9%)となっている。「ごみを減らしたいと考え、いつも、リサイクルなどに取り組んでいる」については、オホーツク圏(43.6%)が最も割合が高く、次いで釧路・根室圏(39.6%)となっている。

#### 【人口規模別】

「ごみを減らしたいと考え、ときどき、リサイクルなどに取り組んでいる」については、札幌市(49.8%)が最も割合が高く、次いで人口10万人以上の都市(46.2%)となっている。「ごみを減らしたいと考え、いつも、リサイクルなどに取り組んでいる」については、町村部(45.5%)が最も割合が高く、次いで人口10万人未満の都市(44.2%)となっている。

#### 【性別】

「ごみを減らしたいと考え、ときどき、リサイクルなどに取り組んでいる」については、男性42.5%、女性44.5%となっており、「ごみを減らしたいと考え、いつも、リサイクルなどに取り組んでいる」については、男性36.5%、女性35.3%となっている。

#### 【年代別】

「ごみを減らしたいと考え、ときどき、リサイクルなどに取り組んでいる」については、40～49歳(47.4%)が最も割合が高く、次いで50～59歳(44.7%)となっている。「ごみを減らしたいと考え、いつも、リサイクルなどに取り組んでいる」については、70歳以上(46.2%)が最も割合が高く、次いで60～69歳(42.5%)となっている。

#### 【職種別】

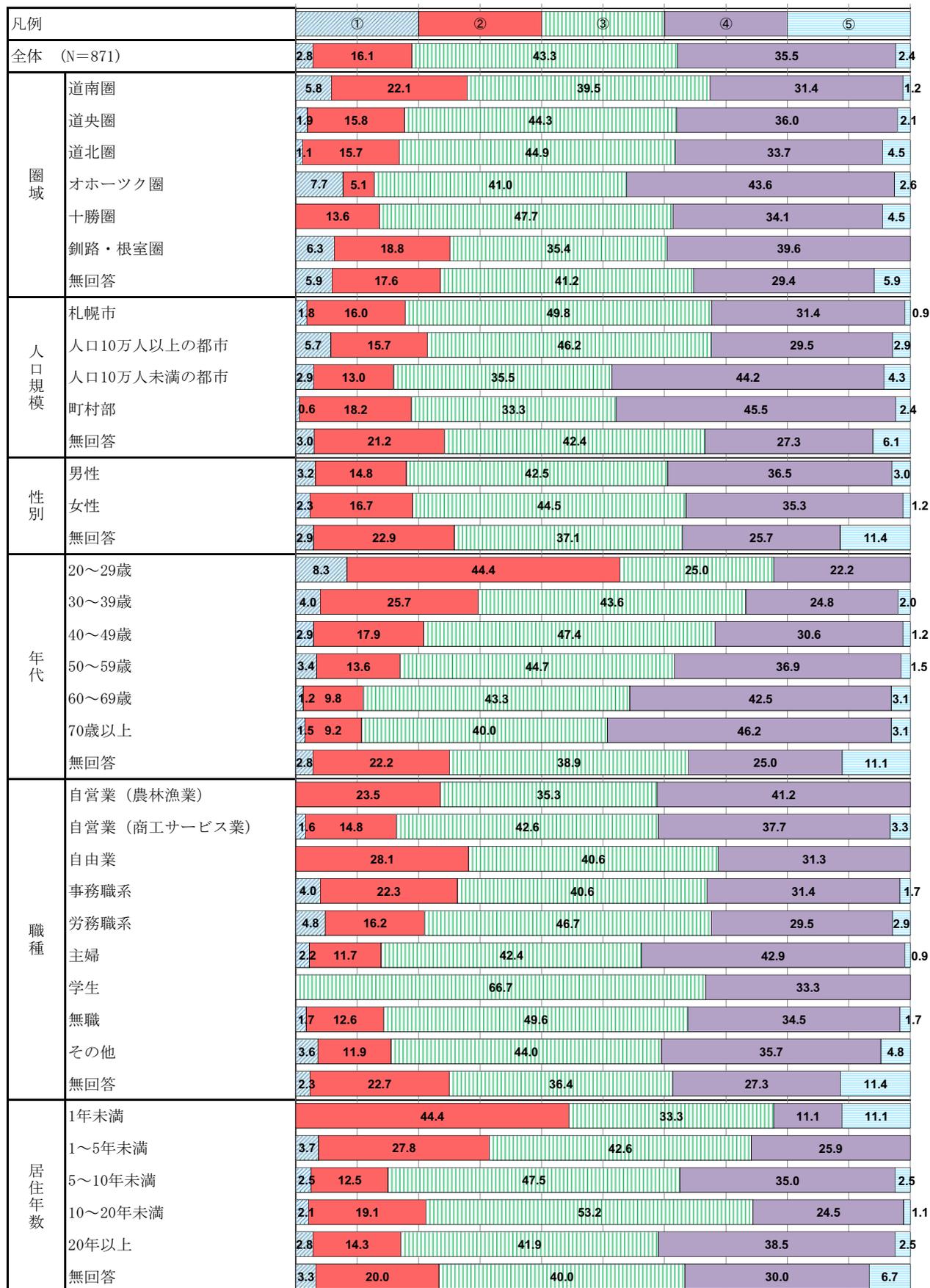
「ごみを減らしたいと考え、ときどき、リサイクルなどに取り組んでいる」については、学生(66.7%)が最も割合が高く、次いで無職(49.6%)となっている。「ごみを減らしたいと考え、いつも、リサイクルなどに取り組んでいる」については、主婦(42.9%)が最も割合が高く、次いで自営業(農林漁業)(41.2%)となっている。

#### 【居住年数別】

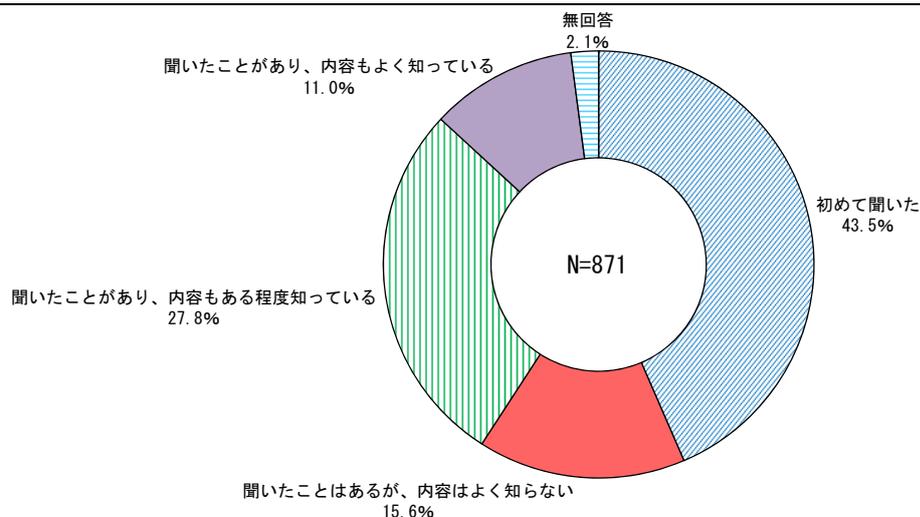
「ごみを減らしたいと考え、ときどき、リサイクルなどに取り組んでいる」については、10～20年未満(53.2%)が最も割合が高く、次いで5～10年未満(47.5%)となっている。「ごみを減らしたいと考え、いつも、リサイクルなどに取り組んでいる」については、20年以上(38.5%)が最も割合が高く、次いで5～10年未満(35.0%)となっている。

- ①ごみを減らしたいとは思っていない ②ごみを減らしたいと考えているが、何もしていない  
 ③ごみを減らしたいと考え、ときどき、リサイクルなどに取り組んでいる  
 ④ごみを減らしたいと考え、いつも、リサイクルなどに取り組んでいる ⑤無回答

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



問5 ごみの減量（リデュース）、再使用（リユース）、再生利用（リサイクル）を併せて「3R（スリーアール）」といいます。あなたは、「3R」という言葉を聞いたことがありますか。次の中から1つだけお選びください。



#### 【全体】

「初めて聞いた」（43.5%）と答えた人の割合が最も高く、次いで「聞いたことがあり、内容もある程度知っている」（27.8%）、「聞いたことはあるが、内容はよく知らない」（15.6%）の順となっている。

#### 【圏域別】

「初めて聞いた」については、道南圏（54.7%）が最も割合が高く、次いで十勝圏（54.5%）となっている。「聞いたことがあり、内容もある程度知っている」については、釧路・根室圏（31.3%）が最も割合が高く、次いで道央圏（30.1%）となっている。

#### 【人口規模別】

「初めて聞いた」については、町村部（46.1%）が最も割合が高く、次いで人口10万人以上の都市（44.8%）となっている。「聞いたことがあり、内容もある程度知っている」については、札幌市（30.2%）が最も割合が高く、次いで人口10万人以上の都市（28.1%）となっている。

#### 【性別】

「初めて聞いた」については、男性44.4%、女性43.6%となっており、「聞いたことがあり、内容もある程度知っている」については、男性26.4%、女性28.3%となっている。

#### 【年代別】

「初めて聞いた」については、70歳以上（52.3%）が最も割合が高く、次いで60～69歳（50.8%）となっている。「聞いたことがあり、内容もある程度知っている」については、20～29歳（50.0%）が最も割合が高く、次いで30～39歳（33.7%）となっている。

#### 【職種別】

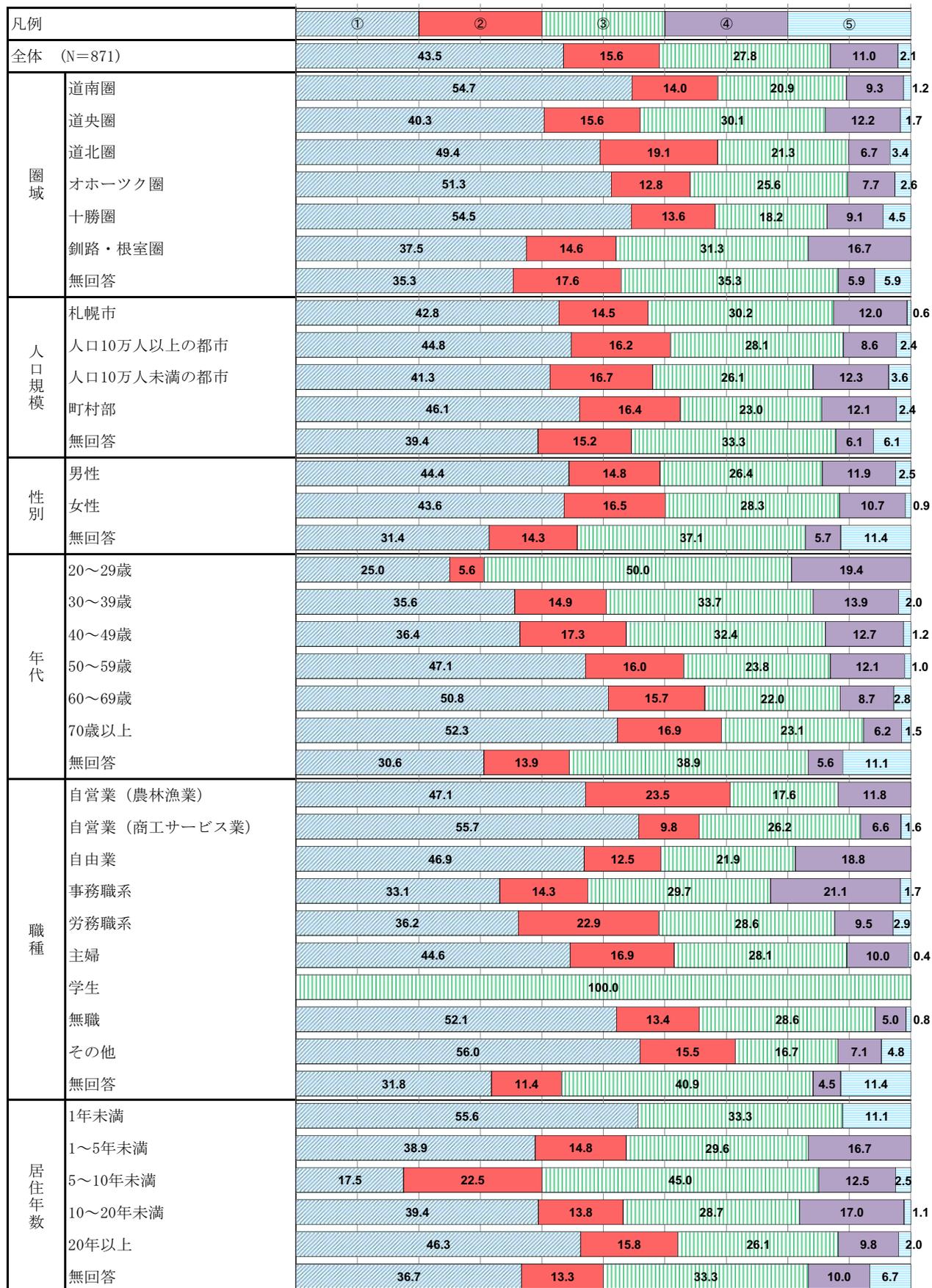
「初めて聞いた」については、その他（56.0%）が最も割合が高く、次いで自営業（商工サービス業）（55.7%）となっている。「聞いたことがあり、内容もある程度知っている」については、学生（100.0%）が最も割合が高く、次いで事務職系（29.7%）となっている。

#### 【居住年数別】

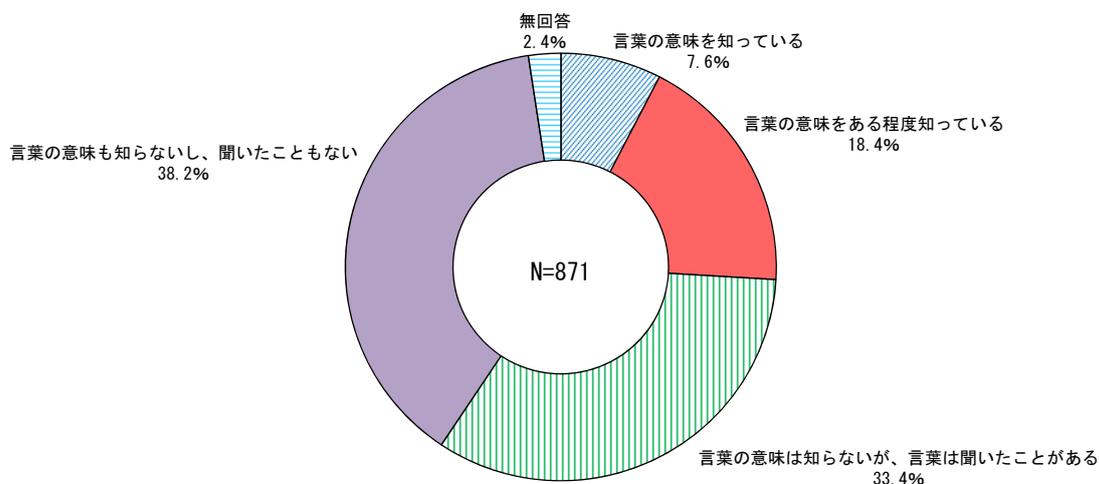
「初めて聞いた」については、1年未満（55.6%）が最も割合が高く、次いで20年以上（46.3%）となっている。「聞いたことがあり、内容もある程度知っている」については、5～10年未満（45.0%）が最も割合が高く、次いで1年未満（33.3%）となっている。

①初めて聞いた ②聞いたことはあるが、内容はよく知らない  
 ③聞いたことがあり、内容もある程度知っている  
 ④聞いたことがあり、内容もよく知っている ⑤無回答

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



問6 あなたは「生物多様性」という言葉をどの程度知っていますか。  
次の中から1つだけお選びください。



#### 【全体】

「言葉の意味も知らないし、聞いたこともない」(38.2%)と答えた人の割合が最も高く、次いで「言葉の意味は知らないが、言葉は聞いたことがある」(33.4%)、「言葉の意味をある程度知っている」(18.4%)の順となっている。

#### 【圏域別】

「言葉の意味も知らないし、聞いたこともない」については、道南圏(48.8%)が最も割合が高く、次いで十勝圏(45.5%)となっている。「言葉の意味は知らないが、言葉は聞いたことがある」については、釧路・根室圏(39.6%)が最も割合が高く、次いでオホーツク圏(38.5%)となっている。

#### 【人口規模別】

「言葉の意味も知らないし、聞いたこともない」については、町村部(42.4%)が最も割合が高く、次いで人口10万人未満の都市(39.9%)となっている。「言葉の意味は知らないが、言葉は聞いたことがある」については、町村部(33.9%)が最も割合が高く、次いで札幌市(33.8%)となっている。

#### 【性別】

「言葉の意味も知らないし、聞いたこともない」については、男性32.8%、女性44.3%となっており、「言葉の意味は知らないが、言葉は聞いたことがある」については、男性35.3%、女性31.8%となっている。

#### 【年代別】

「言葉の意味も知らないし、聞いたこともない」については、50～59歳(46.6%)が最も割合が高く、次いで40～49歳(42.2%)となっている。「言葉の意味は知らないが、言葉は聞いたことがある」については、70歳以上(38.5%)が最も割合が高く、次いで30～39歳(36.6%)となっている。

#### 【職種別】

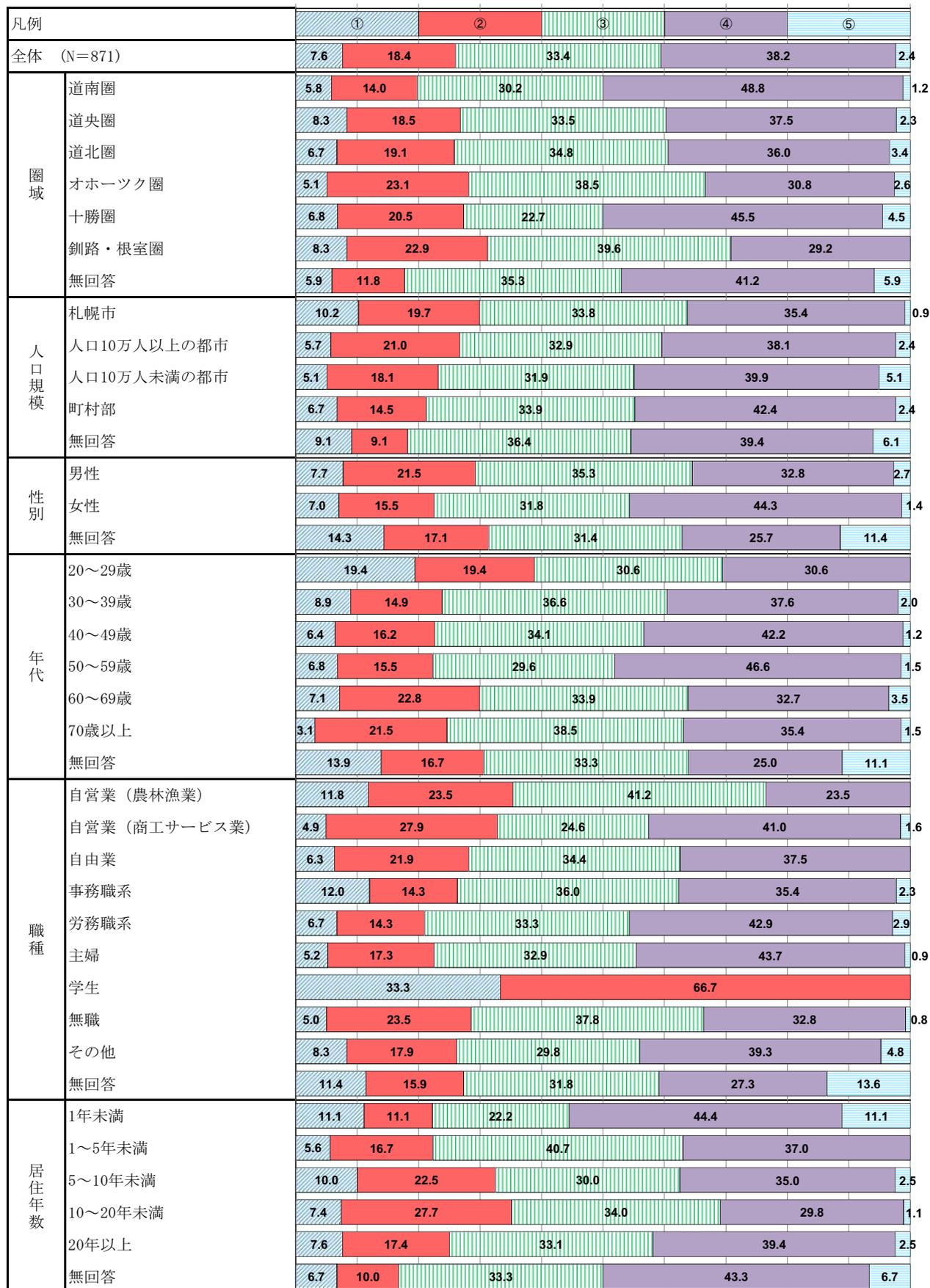
「言葉の意味も知らないし、聞いたこともない」については、主婦(43.7%)が最も割合が高く、次いで労務職系(42.9%)となっている。「言葉の意味は知らないが、言葉は聞いたことがある」については、自営業(農林漁業)(41.2%)が最も割合が高く、次いで無職(37.8%)となっている。

#### 【居住年数別】

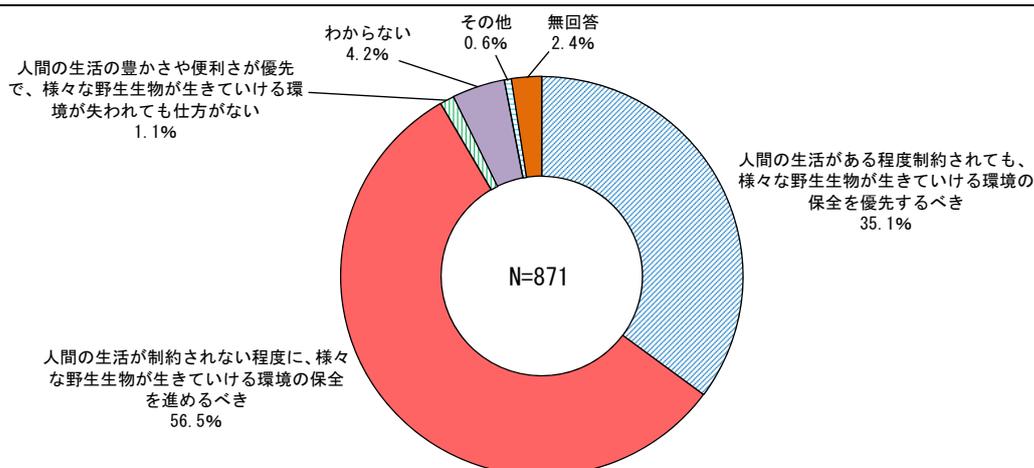
「言葉の意味も知らないし、聞いたこともない」については、1年未満(44.4%)が最も割合が高く、次いで20年以上(39.4%)となっている。「言葉の意味は知らないが、言葉は聞いたことがある」については、1～5年未満(40.7%)が最も割合が高く、次いで10～20年未満(34.0%)となっている。

- ①言葉の意味を知っている ②言葉の意味をある程度知っている  
 ③言葉の意味は知らないが、言葉は聞いたことがある  
 ④言葉の意味も知らないし、聞いたこともない ⑤無回答

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%



問7 地球上の様々な野生生物が生きていけるように環境を守る取組が進められていますが、あなたはどのように思いますか。次の中から1つだけお選びください。



**【全体】**

「人間の生活が制約されない程度に、様々な野生生物が生きていける環境の保全を進めるべき」(56.5%)と答えた人の割合が最も高く、次いで「人間の生活がある程度制約されても、様々な野生生物が生きていける環境の保全を優先すべき」(35.1%)、「わからない」(4.2%)の順となっている。

**【圏域別】**

「人間の生活が制約されない程度に、様々な野生生物が生きていける環境の保全を進めるべき」については、十勝圏(68.2%)が最も割合が高く、次いで釧路・根室圏(62.5%)となっている。「人間の生活がある程度制約されても、様々な野生生物が生きていける環境の保全を優先すべき」については、道央圏(36.9%)が最も割合が高く、次いで釧路・根室圏(33.3%)となっている。

**【人口規模別】**

「人間の生活が制約されない程度に、様々な野生生物が生きていける環境の保全を進めるべき」については、人口10万人未満の都市(60.1%)が最も割合が高く、次いで人口10万人以上の都市(59.0%)となっている。「人間の生活がある程度制約されても、様々な野生生物が生きていける環境の保全を優先すべき」については、札幌市(39.1%)が最も割合が高く、次いで町村部(33.3%)となっている。

**【性別】**

「人間の生活が制約されない程度に、様々な野生生物が生きていける環境の保全を進めるべき」については、男性56.8%、女性56.6%となっており、「人間の生活がある程度制約されても、様々な野生生物が生きていける環境の保全を優先すべき」については、男性34.6%、女性36.2%となっている。

**【年代別】**

「人間の生活が制約されない程度に、様々な野生生物が生きていける環境の保全を進めるべき」については、70歳以上(63.1%)が最も割合が高く、次いで60～69歳(63.0%)となっている。「人間の生活がある程度制約されても、様々な野生生物が生きていける環境の保全を優先すべき」については、40～49歳(43.4%)が最も割合が高く、次いで20～29歳(41.7%)となっている。

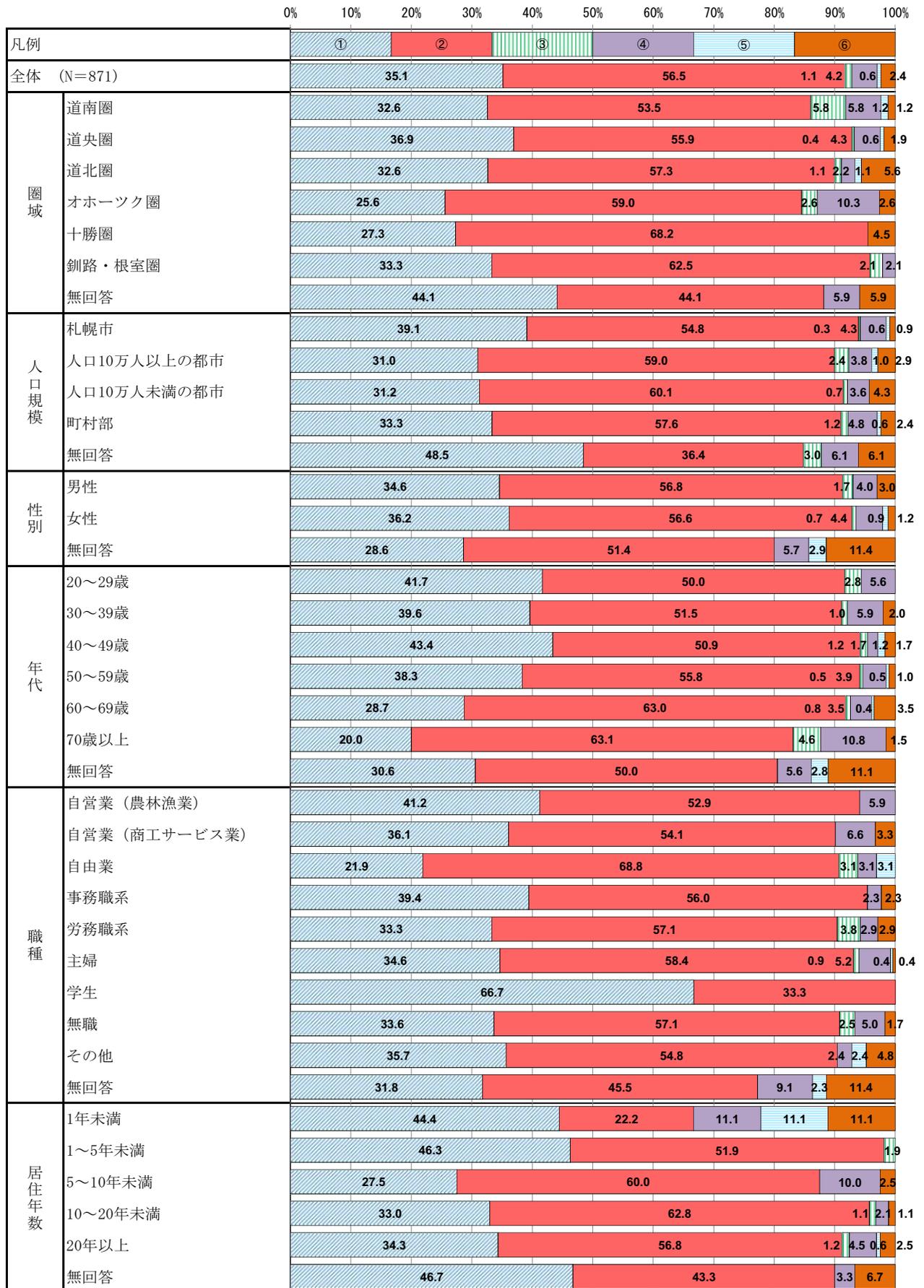
**【職種別】**

「人間の生活が制約されない程度に、様々な野生生物が生きていける環境の保全を進めるべき」については、自由業(68.8%)が最も割合が高く、次いで主婦(58.4%)となっている。「人間の生活がある程度制約されても、様々な野生生物が生きていける環境の保全を優先すべき」については、学生(66.7%)が最も割合が高く、次いで自営業(農林漁業)(41.2%)となっている。

**【居住年数別】**

「人間の生活が制約されない程度に、様々な野生生物が生きていける環境の保全を進めるべき」については、10～20年未満(62.8%)が最も割合が高く、次いで5～10年未満(60.0%)となっている。「人間の生活がある程度制約されても、様々な野生生物が生きていける環境の保全を優先すべき」については、1～5年未満(46.3%)が最も割合が高く、次いで1年未満(44.4%)となっている。

- ①人間の生活がある程度制約されても、様々な野生生物が生きていける環境の保全を優先するべき
- ②人間の生活が制約されない程度に、様々な野生生物が生きていける環境の保全を進めるべき
- ③人間の生活の豊かさや便利さが優先で、様々な野生生物が生きていける環境が失われても仕方がない
- ④わからない
- ⑤その他
- ⑥無回答



## 「エコアイランド北海道について」の調査を終えて

---

道では環境負荷の少ない持続可能な北海道の実現を目指している。

東日本大震災を契機に半数以上の人が一層の節電・省エネに取り組むようになり、以前から省エネに取り組んでいる人とあわせると 70%を超える人が、節電・省エネに意識的に取り組んでいる。また、95%の人がごみを減らしたいと考えており、リサイクルには 79%の人が取り組んでいる。

このほか、日常生活の中で、地球温暖化防止に向けて取り組んでいる内容として、79.9%の人が「買い物際にはマイバックを持ち歩き、省包装の商品を選ぶ」、78.1%の人が「使っていない照明をこまめに消灯する」と回答するなど、日常生活の中での身近な取り組みに対する意識の高さが伺える。

一方、「3R」について、「初めて聞いた」、「聞いたことはあるが、内容はよく知らない」と回答した人をあわせると 59%となっており、また、「生物多様性」についても平成 25 年 3 月に条例が制定されているものの、言葉の意味を知らない人が 72%に上り、道民の皆様に浸透していない面も見られる。

今回の調査結果は、今後の道の環境施策の検討における重要な資料として活用していく。

(環境生活部環境局循環型社会推進課、生物多様性保全課、地球温暖化対策室)